

「一夏、お前はいつになったら声変わりをするのだ？」

「……………いや、私の声の事を言われても……………」

箒の言葉に一夏は、少し困ってしまった。どんなに頑張っても自分は、低い声が出せないのだから…………

「まあ、そこは置いておいて、もっと他にはないの？ 学園唯一の男子だからさ、この学園の女子は”俺の物”とかさっ」

「なっ、なんて破廉恥なっ！！！！」

「あなたには、聞いてないから、少し静かにしてね」

一夏にインタビューをしているのだが、何故か箒が反応することを鬱陶しく思ったのか薫子は、そんなことをのたまいました。

「まあ、この辺は適当に捏造しておくことにしてとにして、次はセシリアさん、代表になった感想ちょうだい」

「ワタクシ、こういったコメントはあまり好きではありませんが、代表になったからにはしっかりと役目を果たさせていただきますわ」

「なるほどね。噂に聞いた印象とは随分と違うわね。もっと、偉そうに言っちゃうかと思ったんだけど」

「どんな噂かは、わかりませんが、ワタクシが変わったのなら、それは一夏さんのおかげですわ」

セシリアの言葉に薫子の目が妖しく光った。一夏は、何か良からぬ

ことを思ったが、口には出さなかった。

「なるほど……、織斑君に惚れたからってことね」

「なっ、なななな……」

薫子の言葉に、セシリアは顔を赤くしてテンパってしまっている。

面白くなさそうに箒は、一夏とセシリアをじと目でみる。

「とりあえず、写真を撮りたいから、クラス代表補佐の織斑君とクラス代表のセシリアちゃん、並んでもらえる？」

「なにっ！？！」

箒がまるで仇に会ったかのような凄んだ目で薫子を見る。

「注目の二人だからね、ツーショットもらつよ、握手とかしてくれるといいかもね。何なら、肩でも組んでもらっていいからさ」

「だめだっ！！！！それはだめだっ！！！！」

箒が一夏とセシリアの間に割って入るように抗議を行う。

「そうだ、そうだっ！！！！」

「織斑君は、皆を支えてくれるから、共有財産だから、独り占めはだめーっ」

クラスメイトの反応にセシリアは残念そうだったが、ツーショット

ならと言つ事で納得した。

「じゃあ、握手でいいね」

これならいいと許せるのか、箒をはじめとしたクラスメイト達も了承した。

「それじゃあ、撮るよー。 $35 \times 51 \div 24$ は？」

「……74・375」

一夏は、何故、この掛け声なのか不思議に思いながらも応える。そんな一夏の思惑をよそにデジカメのシャッターが切られた。

気がつけば、ツーショットではなくクラスメイト達が二人の周りを囲っていて、集合写真になっていた。

「ちょっと、ツーショットではありませんのっ！?!」

セシリアの声に対して、

「いいじゃない、クラスの思い出ってことで」

「そうそう、思い出よ、思い出」

皆でセシリアを丸め込めるようなことを言っており、セシリアは何も言い返せなかった。

かといって、一夏も一夏でどう言っているのか分からないのか、苦笑いを浮かべていたのだった……

一夏

すまない、セシリア。私はこういうとき、どうすればいいのか、分からない。

思えば私は、こういう風に集まって騒ぐということは、ほとんどしなかったな。

私とセシリアのために、パーティーを開いてくれているのは嬉しいのだが、この気持ちをどう伝えればいいのだろうか？

箒も箒で楽しんでくれてそうだし……

パーティーは、その後も盛り上がりを見せ、一組だけではなく他の組の者も加わって更に盛り上がっていた。

セシリアは、完全にパーティーの中心として楽しんでた。

一夏も一夏で中心であったが、こういうのが苦手なのか時折、席を外して気を休めていた。

この時も少し席を外していた。

そこへ、仕事を終えた真耶が一夏の元へやってきた。

「織斑君、楽しんでいますか？」

「ええ、こういうのは初めてですが、まあ、楽しんでます」

「そうですか、それなら良かったです」

真耶は笑みを浮かべて、一夏に応えた。

「そういえば、織斑君。さっき、妙な人からこれを織斑君につて……」

真耶は思い出しように一夏に赤い封筒を手渡した。手渡されたのは、赤い封筒”番犬所からの指令”だった。

「おい、一夏。何だ？その悪趣味な封筒は」

筈は、一夏が手に持っている封筒に対して、不機嫌な目を向ける。

「箒、悪いけど、用事ができたから、席を外すね。山田先生、このことは皆に言っておいてください」

二人に断りを入れて一夏は封筒を取って、そのまま食堂から抜ける。箒も着いていこうとするが、

「……ここから先は箒の関わる所じゃないから……」

「な、何を、不純異性行為は……」

自分を拒むような一夏に対して、箒はムツとするが、一夏の目を見てしまった。

その目は、彼女が全く知らない一夏の姿だった……

箒

私は、一夏を問い詰めることができないまま、その背を見送ってしまった。

あの目を見てしまったのでは、何もいえなくなってしまう。私達が離れて、六年。

一夏の身に何が起きたんだろうか？あの一夏は、少しだけ怖かったな。

お前は、変わらなかったはずだよな。そうだよな……

「おい、篠乃之。一夏は何処に行った？」

気がつくと千冬さんが話しかけてきた。意外だ、こういう集まりには来ないと思っていたのだが、

「はい、用事ができたからって何処かへ行きました。変な赤い封筒を持って……」

「赤い封筒だと……」

その時の千冬さんも一夏と同じく私の知らない表情だった。酷く狼狽していた。

すぐに一夏を追うように千冬さんも食堂を後にしてしまった。

一体、何があったんだ？この六年の間に、あの姉弟に……

一旦、部屋に戻った一夏は、魔道火を使い、指令書を炙る。

”女尊男卑”の陰我より現れしホラー。その発端である”IS”を破壊せんとすべく、その地を目指す。これを速やかに殲滅せよ。ホラーの名は、レギオン”

「レギオンだとっ！?!、こいつは厄介なのが来るぞ」

ヴリルが声を上げて驚く。

「レギオン？どういう奴なんだ？」

「ああ、こいつは現れたときは一体なんだが、人間に憑依すると憑依した人間と似た考えを持つ奴を自分に取り込み、巨大化、もしくは、そいつらを元に増殖する」

「となると、厄介だね。もしかしたら、このIS学園そのものを餌場に、いや、それよりも酷いか……」

「それに、取り込んで巨大化するだけじゃなくて、そいつらと群れることもある」

「早いうちに倒していれば……過ぎてしまっただけは悔やみようは無い」

ね」

「仕方ねえさ、この世情は騎士も法師も人手不足だ。これで二度目だな、巨大ホラーと戦うのは……」

「ああ……分かってる」

一夏は、戦用の服に着替え、魔戒弓を持ち迎撃に向かうべく部屋を後にしようとした時だったが……

「一夏っ！！！！何処へ行くつもりだっ！！！！」

いつの間にか、入り口には部屋の同居人であり、姉の千冬が立っていた。走ってきたのか、少しだけ息を切らして……

「何処つて……ホラーを狩りに……」

一夏は、何気ないように言葉を返した。

「何故だっ！！！！お前は、もうこっち側だろうっ！！！！もう向こうに関わる事はっ……」

千冬は思わず一夏の目を見て黙ってしまった。その目は、彼女が最も嫌う目だった。闇を生きる魔戒騎士の目を……

「前にも言ったけど、私はやめるつもりはないよ。だって、いまさら、全てを忘れて生きるほど、器用じゃないから……」

一夏の目は、邪魔をするなら、例えあなたでもと言わんばかりの”殺気”すら秘めていた。その目を直視してしまった千冬は、何もい

えなかった。

様々な修羅場を越えてきた彼女であっても、苦手なものを受け入れがたいものは存在する。彼女が苦手なものそれは、護るべき存在である”一夏”がもつ魔戒騎士の目である。

受け入れがたいものは、ISですら滅ぼすことの適わない魔獣”ホラー”。

「……………必ず、戻るから……………話は後でもできるよね。姉さん」

すれ違いざまに一夏は、千冬に声を掛け、彼女に背を向ける形でこの場を後にした。

一夏が去った後、千冬は膝を突いて崩れた。俯いた顔は、悲しみを浮かべていた。

千冬

何故だ…何故なんだ、一夏。どうして、お前は、そうまでしてホラーと戦うんだ。

お前は私が護る。だから、何も気にせず、穏やかに日常を生きてくれ。そう願っていた。

かつて、私と束は、お互いの大切なもののためにこの世界を変えた。

私の大切なものが一夏。一夏は、他の人とは違う悩みを持って生まれた。男でも女でもない心と身体を持って……あの時の社会なら一夏は半端者として、男達から下に見られていたかもしれない。

だからこそ、一夏にとっても暮らしやすいようにと私は、束の作ったIS”白騎士”を駆った。

だが、世界は思い描くようにはならなかった。その最もたるのが”ホラー”の存在だ。

私達は、あのとき以上に”陰我”と言うものを生み出し、ホラーにとって都合の良い世界に変えてしまった。

そのために一夏は……魔戒騎士に……

影ながら、人々のために戦うことは、立派なことだとは思うが、あの戦いだけは受け入れることができない。

一夏が、私の前から消えてしまうのが恐ろしい。一年前、初めてホラーと出会い、戦いの場に居合わせた私は、悪夢をみたのだから……

”ウワアアアアアアアアッ！！！！！！！！”

蒼い鎧を纏った一夏が変化した。獣のように咆哮し、禍々しく変化した、その場に居たホラーを引き裂き、周囲を破壊始めたのだ。

そのときに見た、鎧越しにみた一夏は……

”ああ、一夏っ！！！！一夏っ！！！！！！”

一夏を止めようとISを展開したが、あの男に止められてしまった。

”よせっ、お前が行っても何にもならん”

白いコートを纏ったそいつは、私を押しつけて、禍々しく変化した一夏と向かい合う。

”何故だっ！！！！他人のお前に私の一夏が分かるものかっ！！！！！！”

”うるさいっ！！！！お前が、一夏の緊張の糸を切ってしまった。本来ならば、”心滅”などありえなかった！！！！！！”

振り向いたそいつの目は、私を萎縮するだけのものを持っていた。

”鋼牙っ、早くしないと、一夏が鎧に食われるぞ”

”ああ、一夏は、これから多くの人を救う。それをここで、失うわ

けにはいかんっ！！！”

鋼牙という男は、剣を頭上に翳し、円を描いて、一夏のように鎧を召還した。その姿は、眩いばかりの黄金に輝いていた。

そうだ、あの時一夏を救ったのは、”黄金騎士 牙狼”だった。私は何もできずに終わってしまった。

だからこそ、怖いのだ。自分の手が及ばないところに居る一夏がいつか自分を置いて何処かへ行ってしまうのが……

”姐さん…もう少し、大人になったらどうだ？”

いつも一夏の傍に居るあの不届きモノが、いつか言っていた言葉がよぎる。何を言っている、私はもう大人だぞ。ただ、一夏が大切なだけだ……

私は、一夏が育てた花の前に立っていた。これは、一夏が家から持ってきた私物の一つで私も気に入っている奴だ。

そういえば、花にも性別がなかったな。一夏は花のようだな。ただ、日のあたるところではなく、闇の中に咲いている……

ある一団がIS学園を目指していた。それは、数十人からなる男達が集団を組んで進んでいたのだ。

彼らが進むたびに辺りの雰囲気が暗くなり、また、その場に居合わせてしまったものは影に飲み込まれ、一団に加わってしまう。

その先頭にいる男は、数百メートル離れた場所にあるIS学園に視線を向け、嗤った。瞳に魔界文字を浮かべて……

「僕は、今日、この社会を変えてみせる。この手に入れた”力”でっ……！」

男に合わせるように、集団の面の皮膚が割れ、そこから醜悪な”悪魔”の顔が現れる。目は赤く、禍々しく輝いていた。

「行くぞっ……！！！！！」

これから起こす革命に対して、意気揚々と進もうとするのだが、

「……………悪いが、この先には行かせる訳には行かないよ」

集団と対峙するように、蒼いコートを靡かせる人物が一人。弓を持ち、それに付けられている刃を向けて……………

「なんだっ、お前は、まさか、IS学園の関係者か？女あッ」

集団と対峙する一夏は、少しだけシニカルに笑い、

「お前達の天敵だ。それと、私は、どちらでもない」

ホラーに対して、一夏は弓を構え、牽制する。

「魔戒法師かつ、ならば、恐れるにたらんっ!!!」

ホラーは、自身の集団の何人かを一夏に差し向けた。差し向けられた者達は、様々な凶器を持ち、一夏に襲い掛かる。

その瞬発力は人間のそれを遥かに超えており、並みの人間ならば、あっという間に袋叩きにされ、餌食にされたであろう。

一夏は、魔戒騎士である。故に、集団にたいして、切り込み、三人を同時に地に伏せさせた。

直ぐに立ち上がり、蹴り、拳、凶器による攻撃が一夏を狙う。狙いに対して、一夏はこれを回避し、魔戒弓による斬撃ですべて切り伏せた。

相手の腕が飛び、足が切られ、凶器は破壊された。

倒される集団に対して、ホラーは

「その弓、まさかソウルメタル。貴様、法師ではなく、魔戒騎士だ
というのか？」

「ああ、どちらでもないがな」

言葉と共に、矢をホラーに対して放った。放たれた矢に対して、腕を甲殻類を思わせる物に変えて、それを防いだ。

「なるほど、最近よくみる。男らしくも無ければ、女らしくも無い半端者か？だが、僕の敵じゃない！！！！！！」

男の身体が弾け、中からホラー レギオンが姿を現す。それは、三つの角をもつ甲虫を思わせる頭部を持ち、半身は蛇の尾の姿をしていた。

それだけでは、終わらずに回りに居たものを取り込み始めた、一夏のすぐ傍に転がっていたモノも手当たり次第に、

肉体が溶け合い、黒い瘴気と共にホラー レギオンが巨大化していく。巨大化したレギオンは有に十メートルはあるであろうという巨体であった。

その光景に、一夏は……

「前に戦ったのよりも遥かに大きい」

「ああ、こいつを絶対に学園には近づけるな。入らせたら、とんでもないことになるぞ」

ヴリルの言葉に頷く。このホラーならば、IS学園を一晩で全滅させるだけの力はあるであろう。

一夏は、地を蹴り、普通ならありえない高さまで飛び上がったと同時に、レギオンの頭部めがけて矢を放った。

放たれた矢は、二、三発と放たれるが、レギオンの皮膚は硬く、矢は全て跳ね返ってしまう。

「っ！！？！！」

普通なら、刺さるはずだが跳ね返ってしまうのは、流石の一夏も驚いてしまった。

レギオンは、宙に居る一夏に対して、禍々しい角を突きたてるべく突進を行った。迫る角を刃で受け流しながら一夏は、ホラーの身体に飛び乗るが、

飛び乗った瞬間、皮膚からまるで浮かび上がるように、小型のレギオンが姿を現したのだ。一夏の前後を取り囲むように

「これが……」

「ああ、分裂だ。気をつけろ！！！！」

前後から来る小型レギオンの攻撃を魔戒弓を大きく振りかぶることで防いだ。金属音がなると同時に二体のレギオンが吹っ飛ぶが、その瞬間に地響きと同時に足場が揺れる。

レギオンが動いたのだ。動いたレギオンに合わせる様に、小型の二匹は溶け込むように本体の中に還った。

足場があまりにも悪いため、一夏は、一旦レギオンの本体から降りる。数メートル先まで離れて、一夏は

「巨大化と分裂……恐ろしく厄介な能力だ」

「そうだ、レギオンはかなり厄介だ。どうやって、片付ける？」

一夏の言葉にヴリルが問う。一夏の答えは決まっている。戦いを長引かせるわけにもいかない。

「これで、決めるっ！！！」

その言葉と同時に一夏は、魔戒弓を頭上に掲げて、円を描き”鎧”を召還する。光と共に蒼い狼を模した鎧が現れた。

同時に大きく変化した魔戒弓を掲げると同時に、魔道火を矢に点火させ、レギオンに放った。

狙うは、レギオンの蛇のような皮膚をした半身。この部分は、頭部のように硬い外骨格で覆われてはいない。

一夏の狙い通り、矢はレギオンの半身に刺さり、炎が侵食し、その身体を粉碎する。だが、巨体だけに、致命傷には至っていない。それどころか、再生をしている。

再び矢を放つべく弓を構えようとすると、レギオンはその巨体をもつて一夏に突進を仕掛けてきた。

恐ろしい硬度を誇っているレギオンの外骨格を正面から受けるのは、魔戒騎士でも厳しい。故に一夏は、上空に飛び上がることで回避する。

アスファルトが割れ、地響きで震える。魔戒弓を構え、魔道火を伴った矢をレギオンの半身に放つ。だが、身体から現れた分身が盾となり防ぐ。

矢で消滅させたのは、分身であり、本体には傷がついていない。

「くっ！？！矢が何本あっても足りないっ！！！」

レギオンは一夏の狙いを察したのか、周りを固めるように自身の分身を出現させた。

「まったくだ。何で、こんな奴が出てくるんだっ！！！！！」

ヴリルも、レギオンの能力に対して辟易していた。細かいところを狙っても分裂か再生を繰り返す。

「だったら、烈火炎装で奴が分裂も再生ができないぐらいに切り込むっ！！！」

一夏は、魔戒弓に魔道火の炎を纏わせたと同時に自身の鎧にも炎を纏わせた。橙色の炎が蒼い鎧を照らす。

横一文字に魔戒弓の刃による魔道火を帯びた剣圧が一直線にレギオンの半身を切る。切られた半身は魔道火により燃え上がる。だが、身体はまだ残っており、そこから、二体目のレギオンに成ろうとするが……

一夏は既に駆け出し、さらなる剣圧を近い距離から放ち、二体目に成ろうとしていたレギオンを魔道火の炎で、焼き尽くし、消滅させた。

上半身だけのレギオンは信じられないのか、呆然としていた。無限に再生と増殖を繰り返す自身の身体を消滅させるなど……

一夏は、レギオンの上半身よりも高く飛び上がり、魔道火を帯びた魔戒弓による斬撃は、レギオンを真つ二つに焼ききったのだ。

焼き切られたレギオンの左右の身体は消滅したと同時に一夏はアスファルトの上に着地した。

一夏と同じく、奇妙な肉の塊が目の前に落ちた。うつすらと男の顔を浮かべて……

”嫌だ…僕は、この酷い世界を変える力を得たんだ。あそこには、全ての元凶があるのに……”

悔しそうな男の顔に対し、猛々しい蒼い狼は、

「たとえば、この世界を酷い物に変えた元凶であっても、私にとっては、かけがえのない”大切な人達”だっ！……！！！」

魔戒弓の炎を未だ衰えず、肉の塊に対して大きく振りかぶり……

「それにお前は、ホラーに憑依された時に死んでいたっ！……！！！」

振りかぶられた炎は、肉の塊を塵を残さずに消滅させた……

鎧が解除され、辺りには静けさが漂った。不意に懐かしい感じを背後に感じ、振り返った。

「久しぶりね、一夏」

目の前に小柄な少女が立っていた。

「鈴」

彼女の名は、凰 鈴音。一夏にとって、筈に続くもつとも懐かしい存在である。

「ああ、久しぶりだね。一年ぶりかな」

「そうね、アタシもこの一年を頑張ってきたわ」

鈴は、一夏に自身の相棒である大筆の”魔道筆”を掲げた。

「魔戒法師になれたんだね」

「何言ってるのよ。アタシは、まだまだ半人前よ。烈花さんからは、仮免の評価だから……」

その言葉と同時に鈴の肩に、小さな魔戒魚が姿を現した。

鈴

IS学園に向かう途中で、まさか一夏とホラーとの戦いに出くわすなんて……アタシはとことん、厄介ごとに縁があるらしい。

IS学園に来たのは、アタシが魔戒法師として、一夏の補佐役として指令が出たからだ。

アタシ自身も驚いたわよ。だって、まだ修行をして一年ぐらいのアタシが前線に行くなんてね。

当然、この一年は死にそうな目には、何度も合ったし、目を背けたくなるようなものだって見てきた。

半年程、閑岱で基礎を学んで、経験を積むために魔戒法師の烈花さんに師事してきた。

”もつと冷静になれ！！頭に血が上りやすいのは、お前の悪い癖だ”

”愚か者っ！！！！ただ敵を倒せばいいのではないっ！！！！”

”俺達が護らなければならないのは、多く人々の未来だ！！！！敵を倒すよりも護ることを優先しろっ！！！！鈴っ！！！！！！”

” 甘いつ！！！俺がホラーならば、シグトは死んでいたぞつ！！！”

” 卑怯？それをホラーに対しても言つつもりかっ？”

烈花さんは、本当に厳しかったわ。口調は”俺”で、一夏以上に男らしい女の人だった。

話を戻すけど、IS学園に向かう途中でアタシは、一夏が巨大なホラーと戦っているのを見た。一年前に比べると格段に強くなっていた。

アタシじゃ、まだ届かない。一夏が、どれだけ努力を積んで魔戒騎士になったかはよく分かっている。だって、魔戒騎士は決して才能だけじゃなれない。

才能以上の努力が必要だったから……、一夏は、普通の魔戒騎士なら倒すのが困難な巨大ホラーを倒した。

目の前にいる一夏は強くなっている。だけど、アタシよりも綺麗になっっているのは納得できない……

一夏と鈴は、IS学園の校門前を揃って歩いていた。

「鈴。元気だった？」

「元気も元気ね。烈花さんの前で落ち込んだら、アタシが元気になるまでボコられるわよ」

鈴は一夏に、自身の師匠の理不尽さを語る。一夏は、鈴が相変わらずの様子なので、思わず笑みが浮かんだ。

「シグトの優しさが身にしみるわ」

生意気にも年上の、先輩の魔戒法師を呼び捨てである。これは師匠がいないからこそ、言えるのだ。

「私は、鈴の師とは面識はないけど、いい魔戒法師なんだね」

「ええ、お父さんもお母さんもいい人だって、言ってくれてるわ」

鈴は、まるで自分の事のように嬉しそうな笑顔を一夏に向けた。幼いながらも、人の気持ちを暖かくさせてくれる笑みだ。

「それと、一夏。たまには、アタシん家に顔を出しなさい。お父さん、嘆いていたわよ、”恩人”が来てくれないって」

「ああ、でもおじさんとおばさんは、鈴が魔戒法師なのには、平気なの？」

「千冬さんみたいな事、言ってんじゃないわよ。アタシは自分で考えて決めたの、お父さんとお母さんとちゃんと向かい合ってるわ」

鈴の言葉に一夏は、

「そうか、私は失礼なことを言ってしまったな」

「そうね。もう少し、察しなさい。あんたも”女の子”なんだから」

茶目つ気たつぷりに鈴は、一夏の鼻の先に指を当てたのだった……

彼女は、一夏が”IS”インターセックス 中性であることを知っている。

「そうだな、一夏。一応、お前も女なんだからじゃなくて。鈴、そこは、男も女も関係ないんじゃないか？」

先ほどから黙っていたヴリルが会話に加わる。

「あ、そういえば、あんたも居たわね。ヴリル」

「居たわね、じゃねえよ、俺を無視するとは、いい度胸してんじゃねえか？」

ヴリルが、俺が折角、気を使ってやったのと言わんばかりに言いあげた……

翌日、パーティーを途中で抜け出したことについてセシリアに少し、言われてしまった一夏だったが、放課後にISの訓練に付き合うということで機嫌を直してもらった。

そんな一夏を箒は、少しだけ不満な目で見ていた……

箒

あの後、一夏はパーティーには戻らなかった。皆、残念がっていたが、私としてはこれ以上一夏が他の女に気を取られないで思うと良かったと思ってしまったが。

千冬さんも戻ってこなかったし、あれから一夏は何をしていたのだろうか？

あの怖い目をしていた一夏。そして、昨晚、一夏と親しげに話していたあの”女”。

一夏の事が気になって探しに行ったが、何処にもいなかった。

一時間経ってから、私は一夏を昇降口付近で見つけた。声を掛けようとおもったが、できなかった。

なぜなら、一夏の隣に私の知らない女が居たからだ……

親しげに話すその女は、誰なんだ？一夏……

それにお前は、今、何をしているんだ……私の知らないところで？

第陸話「訪問者」（後書き）

さて、ホラー介入と同時に鈴 参戦。彼女は、魔戒法師です。師は烈花で、彼女同様に魔戒魚を用いた術を使います。

よくクロスモノで鈴が代表候補生でありながら、確かオーズとのクロスでバースをやっていたのがありましたので、

思い切って代表候補生ではなく、一般生徒？な立ち居地で、強化で魔戒法師になりました。強さに関しては原作よりも少しだけ上という具合です。

回想では、ありますが鋼牙ができませんでした。一応IS原作にも出演はありますので、ここだけでは、終わらないです。

中国の代表候補生は、一応IS学園にいますが、モブっぽい人物です。二組在籍ですよ。

今回は、ISの部分とGARROの部分の折り合いが中々難しかったです。

ラブコメっぽいのは、苦手だなと思うしでした。

それでは、予告を……

さて、鈴と再会した俺たちだが、二人のお嬢ちゃんに様子が少しおかしいな？

お前達二人は、一夏に恋でもしたか？だったら、生半可な気持ちで近づいたら、許さんぞ。

鈴は、一夏を真剣に想っているんだからな……

次回！「凰 鈴音」

さて、これからが面白くなりそうだな。特に一夏の周りが……フフフフ

ああ、そうそう、作者が牙狼の番外編の”呀 暗黒騎士 鎧伝”で流れたEDをFULLで聞いてな、それに感激して

短編を書いたらしいぞ。何でも、クロスオーバーでだが、意外と周りの奴から好評で連載も考えているらしい。

ペースは、二週に一度ぐらいでやる予定だとよ……

第漆話「鳳鈴音」（前書き）

今週は、やたら忙しく前の投稿からかなり間が空いてしまいました。牙狼は先週と今週を見ましたが、先週の鋼牙の可愛いところが見えてよかったです。

アレなら、鋼牙よりも零の方が適役なのではと思いました（笑）

元老院は、どういう基準でホラー狩りに行く騎士を選んでいるのだろうか？

今週のは、ホラー色がかなり強く、最後のアレは、ホラーよりも●の方があ意味もつとも恐ろしいかもと思うものでした……

先週よりも今週のホラーのデザインが、凄く好みでした。

雨宮さんのデザインは女性的なラインを使うことが多いので、今回のホラーもそれっぽい感じです。

それでは、最新話です。どうぞっ！！！！

第漆話「鳳鈴音」

二日前

とある町の中華料理店は、久々に賑わっていた。営業時間は既に過ぎていたのだが、今、数週間ぶりに”家族”が帰ってきたのだ。

「ただいまっ！！！！お父さんっ！！！！」

「おおっ、鈴っ！！！！よく帰ってきたっ！！！！」

久々の娘の帰りに父は、思いつきりその身体を抱きしめた。

「鈴。私からも言わせて、お帰りなさい」

いつの間にか、母もまた娘の姿を笑顔で迎えていた。

「うんっ！！！！お母さん。ただいまっ！！！！」

一家団欒の雰囲気では鈴は、数週間ぶりに父と母の料理を楽しんだ。

「鈴、やっぱり世の中は大変か？」

「うん、それなりにね。だけど、アタシは一人じゃないから……烈花さんにシグト、それに”この子達”も居るしね」

鈴の言葉に合わせるように肩の上に宙に浮かぶ魚が現れた。魔戒魚と呼ばれる生物である。

魔戒魚は、部屋の隅においてある大きな旅行用のスーツケース程の大きさの”モノ”の周りを舞いだした。合わせる様に、それは変形し、二脚の竜？”号竜”へと姿を変える。

大きさは、”ダチヨウ”程もありでかい。その姿に、両親は大いに驚く。娘が”魔戒法師”を目指してからは驚くことの連続だ。

「こら、”ヴォルト”いきなり変形しないの。戻りなさい」

変形した”号竜”を嗜めると、鈴の言葉に合わせて号竜はスーツケースの姿に戻った。

「驚いたわね。お魚ちゃんは知っているけど、そっちの子ははじめて見るわね」

母は、スーツケースを見てそう呟いた。

「うん、この子は号竜っていうの、名前は”ヴォルト”。私の新しい”仲間”よ」

鈴の言葉に喜ぶようにスーツケースの中心にある”魔獣の核”が点滅する。鈴の言葉が分かっているようだ。

その様子に、父と母は、内心穏やかであった。

「鈴がこうして笑ってくれるのはいいものだな」

「ええ、これも一夏君と魔戒騎士さん達のおかげですね。あなた」

「ああ、そうだな。鈴も彼らのように”護りし者”として、誰かを救っていくんだろうな」

鈴の父

一年前、俺の家族は”崩壊”の危機に陥っていた。理由は、妻の故郷である”中国”より、娘を引き渡せといわれた。

国家が総力を挙げ、作り上げた”IS”のために……。鈴には、何も話さずに、”離婚”の話を進めていたが、鈴の幼馴染である”織斑一夏”が

”鈴の為なら、どうしてもして離婚なんてするんだっ！！！！！鈴の気持ちを知ったのかっ！！！！！！”

”ただ、相手がどうしようもないからって、初めから諦めるなんて私は認め、いや許さないっ！！！！！！”

今、思えば事情も知らない他人が良くここまでいえたものだ。だが、織斑一夏が言った事は事実だった。娘は…鈴は……

”ここは私の家よっ！！！！何で、お父さんとお母さんが別れなくちゃいけないの！！！！！！ここから居なくなるなんて嫌よっ！！！！！！”

その言葉に、俺は娘のために戦わなくてはと思った。一家を護れなくて何が父だ。妻を、娘を悲しませるなんて…そんな情けないことをしてたまるかと……

何とかして、俺はたくさんの人との協力を経て離婚をすることなく、国から家族を護れたのだ。

あの時は、信じられないことが立て続けに起こった。鈴の幼馴染の一夏君は、“魔戒騎士”という戦士で、ホラーという魔獣と戦い続けているというからだ。

俺もこの目で見るまでは、信じられなかった。聞けば、あのホラーはISですら倒すことができないという。その圧倒的な存在に、立ち向かう彼らに背を押されて、俺も戦うことを決めたのだ。

一夏君もこれまでにない強大なホラーとの戦いの最中だったのに、鈴の事を気にかけてくれたことは本当に感謝しきれない。

“俺もさ、家族が居たんだ。血は繋がらなかったけど、あの人は紛れもなく俺の父さんだった”

“だからさあ、俺は、理不尽な理由で家族が居なくなるのも、奪われるのも嫌なんだよ”

彼が一夏君を迎えに来た時に、彼こと“涼邑 零”と話したが、彼もまた理不尽な理由で家族を、愛する者を奪われたらしい。だけど、彼には“家族”がただ一人残っており、“家族”が居る限り戦い続ける……

だから俺も、家族を護り続けようと誓った。彼らのように戦えなく

ても俺は俺の戦いを…鈴がいつでも帰ってこられるように……

鈴の母

この子には、本当に驚かされるわ。普通の女の子だったのに、この一年で見違えるほどになったわ。まだまだ、半人前だというけど、私からしては、もう十分すぎるほど……

自分の信念の元、闇の中に身を捧げる事は、親として”納得”はできないけれど、この子の意思は固い。

鈴は、魔戒法師になると言ったのだ。

”アタシは、一夏を支えられる魔戒法師に、いえ、一夏達みたいに誰かを護る、護りし者になりたいっ！！！！”

そう言った鈴の決意は固かった。いつの間にか、一人の”女”の目をしていたから……

私達は鈴の意思を尊重することにした。夫も戸惑っていたけど、鈴は自身の歩むべき道を見出し、そこに進むうとしている。その背中を見送るのは”親”として、当然のことだ。

鈴は必ず戻ると言って、時々顔を出しに戻ってきてくれる………

一家の住む料理店に二人の影が近づく。一人は人の良さそうな青年シグトともう一人は凜とした長身の女性 烈花である。

「烈花。鈴に何を言いにいくんだ？」

「何も言わん。鈴には、まだまだ教え足りんが、俺は、こいつを渡しに行くだけだ」

烈花は手のひらに一匹の魔戒魚を乗せた。二人は、賑やかな声が響く中華料理店の戸に手を掛けた。

「夜分、遅く尋ねてきてすまんっ！！！！ここに凰鈴音は居るかっ！！！！」

烈花が堂々と声を上げた。この声に反応するように奥から慌しい鈴の聲が聞こえてきた。

「れ、烈花さんっ！？！ちよ、ちよと待ってくださいっ！！！！
今、開けますからっ！！！！」

慌しく戸をあけた鈴に烈花は一発、拳を浴びせた。

「っあッ！！！」

声にならない悲鳴を上げて、鈴はいつにもまして理不尽な一撃を呪った。

「まったく、もう少し堂々と構えろっ！！そんな事で一人前には成れんぞっ！！！！」

いつにも増して厳しい師の言葉。

「まあまあ、烈花もそのぐらいにしとけよ」

「シグト、甘やかしては鈴のためには成らん」

師は、自分を”一人前”にするまでは、ずっとこの調子なのではないと思う鈴であった。

「あの、魔戒法師の方ですか？もしかして、鈴の師匠の方？」

三人の様子に対し、鈴の母が尋ねてきた。

「ああ、この未熟者をモノにするために、師匠をやっている」

「そうですか、どうぞ、中へ」

「いや、用事は直ぐに済む。ここで構わない」

烈花は、鈴に視線を合わせる様に屈み、

「鈴、お前に渡すものがある。こいつをお前に渡したい」

鈴がモノを言う前に、烈花は一本の”笛”を手渡した。

「烈花さん。これ……」

「これは、俺がお前に伝えた”モノ”だ」

それは、師である烈花が愛用していた”笛”であった。

「鈴、けっして無茶をするな。お前が俺の力を必要とするなら、呼べ。必ず駆けつける」

「……烈花さん」

「お前は、まだまだ半人前だ。だが、その一途な”心”だけを決して忘れるな。そして、一人ではないことを……」

烈花は、伝えるべきことを伝え背を向けシグトを伴って去っていった。

鈴は、師である烈花の背を見送ると同時に、笛を口につけ、師が奏でていた曲を吹く。

”英霊達への鎮魂”を……

師がくたくたになった自分を労るように奏でていた、あの何処か切なくも心に響く旋律を……

一年一組 教室

「一夏さんっ！……！昨日のパーティー、どうして抜け出したんですかっ！……！」

「そっだよ、織斑君っ！……！酷いよっ！……！」

「そっだよ……」

セシリアと数人の女子が一夏に詰め寄っていた。理由は言うまでもなく、パーティーの主役の内の一人が途中で何処かに行ってしまった事による憤りである。

「すまないセシリア。少し用事ができたもので、行かなければならなかったんだ」

一夏は、予め考えておいた言い訳を頭に浮かべた。

「用事って、何ですか？」

セシリアの言葉に一夏は、ある人物の”名前”を出す。

「篠乃之博士から、蒼牙のデータを確認させるって催促があつて……」

「まあ、篠乃之博士が……もう少し融通を利かせられませんの？」

「私自身の報告が遅れてしまったのが原因だ。私の身から出た錆だよ」

「まあ、一夏さんもうっかりしてますわね。しっかりしてくださいませ」

一夏の言葉にセシリアは納得の意を示した。噂に聞くと一夏は篠乃之博士の直属となっており、調査のために専用機を持っているのだ。

これに関しては、皆は”それなら仕方がない”と言わんばかりに納得してしまった。もう少しだけ融通ぐらいはとも思ってしまった。

だが、そんな一夏に対して、箒はすこし胡散臭いものを感じていた。

あの人からの催促？違っただろ、あの方は、呼び出すんじゃないで自分からやってくる。

なあ、一夏。お前は、何故、私達に嘘をつく？

あの変な赤い封筒と千冬さんのうるたえよう、そしてお前の変わりよう……

何がどうなっているんだ？それにあの人から教えてもらった番号もいつの間にか消えていた。

絶対に掛けることはないと思うから、消えてても問題はないが……

何を私に隠しているんだ？一夏……それにあの人何を考えて……

昔から良く分からなかったあの人だが、今になっても良く分からない……

職員室

ここに一人の転校生 凰鈴音と一組担任の織斑千冬の二人が対峙していた。

「…………お前が転校生か？凰」

千冬は少し目を鋭くして、鈴に言葉を掛けた。鈴はそんな千冬に対して

「そうよ、千冬さん、じゃなくて織斑先生」

余裕なのか笑みすら浮かべている。大抵の生徒は自分の睨みには、萎縮するのに、それが通用しないことに少しだけ、千冬は心のうちで毒を吐いた。

「何故？今になって転校してきた。お前はISが嫌いではなかったのではないか？」

「織斑先生。アタシに尋問するつもり？そうよ、ISは嫌いよ、大嫌いよっ！！！」

鈴は、わざと聞こえるように声を大きくした。これには、他の先生達も驚く。ISの嫌いな人間が学園に何のようがあるのかと……

「ISが嫌いなお前が、ここに何のようだ？それに”アレ”はここには、現れん」

「”アレ”は、こここの”陰我”からは出ていないわ。今のところ……だけど、昨日は此处を目指して、直ぐ近くまで来たわ」

昨晚の戦いは、一般人の目撃者こそはいなかったが、何かしらの痕跡は残っていた。千冬は、忌々しそうに表情をゆがめた。

(……まったく、どうしてホラーはここを目指した。何故だ……)
この学園まで近づいてきたホラーに対して、怒りを覚える千冬であった。

「最近になって、ますます増えているわ。何かの前兆かも……」

鈴は、ISによる陰我とは言わなかったが、此処のところホラーが増えていることだけを伝えた。

「分かった。だが、あまりここで騒ぎは起こすなよ。收拾が大変だからな……」

「それ、一夏にも言ったの？」

その言葉に千冬の顔に陰が差した。鈴は、彼女が一年前よりはマシになったが、あまり変わっていないのを察した。

(千冬さん、まだ諦めていないんだ。一夏は一夏の意味で決めたのに、それをまだ他の道があるって……)

鈴も千冬にとって、一夏がとても大切な存在で護ろうとしているのは理解している。そして、あまりにも愛しすぎていることを……

空気が重くなる前に話を切り上げ、鈴は一年一組への転入が決まったのであった。

(一夏も一夏で、千冬さんには甘いんだから)

一年一組

「えーと、今日はなんと転校生を紹介します」

真耶が、SHRで明るく声を上げるが、クラスメイトの乗りはあまり良くない。

一夏は、誰が来たのかは察しがついていたが

「山田先生。気を落とさないでください」

「ああ、織斑君だけです。私の味方は……」

少し涙目の真耶に少しだけ、一夏は引きつった笑みを浮かべた。

この先生は、生徒に舐められているのではないかと思ってしまうのは、自分だけだろうか和一夏は思った。

「凰鈴音さん。入ってきてください」

気を取り直して、真耶が呼びかけると教室に小柄な女生徒が入ってきた。

「こんにちはー、皆さん。凰鈴音です。よろしくねっ!!!」

明るい声と共に自己紹介をした鈴であった。少女の様子に一夏も、自分の知る鈴だと思い、自然と笑みが浮かんだ。

「一夏は、正面ね。先生、一夏の隣、良いですか？」

「えっ、凰さんは、織斑君を知っているんですか？二人は、知り合いですか？」

真耶が、親しそうに一夏に声を掛けた鈴に対して問いかけた。ここで一夏が声を上げる。

「はい。鈴とは、小学校の頃からの知り合いです」

「そうなんで「待てっ!!!」そんな話は聞いていないぞっ!!!」

箒が真耶の言葉を切るように声を上げた。激情しているのか、目が釣りあがっている。

「騒ぐなっ、篠乃之」

「っ!?!」

いつの間にか傍まで来ていた千冬の拳により、箒は沈黙せざる終えなかった。

何故か開いていた隣の席に座る鈴に対して、箒はただ不機嫌に睨むしかなかった。

「一夏、一年ぶりだけど、よろしくね」

「ああ、私のほうこそ、よろしく頼むよ。鈴」

あまりに親しげな様子にクラス全体が衝撃を受けたように目を丸くしていた。

セシリア

一夏さんっ！！誰ですの？その人はっ！！！！幼馴染は篠乃之さんだけでは、ないのですかっ！！？！

それに一年ぶりだなんて………どういう関係か、はっきりさせてくださいませっ！！！！一夏さんっ！！！！！！

なんですか？知り合いだからって少し、慣れ慣れしすぎますわ。

一夏さんも一夏さんで、何だか嬉しそうですし…何だか、ムカつきますわ……

S H Rが終わった途端、一夏に詰め寄る箒とセシリアは

「一夏さんっ！……！その人は、一体誰ですのっ！……！」

「そうだぞっ！……！一夏、説明をしろっ！……！」

まるで怒髪、天を付かんばかりに怒っている。そんな二人を鈴は少しだけ、呆れた視線を向けた。

（……そんなにアタシと一夏が仲がいいのが気に入らないのかな？）

そんな鈴の横で一夏が応える。

「私の幼馴染だよ」

一夏の言葉に箒は、

「私は、こんな奴は知らんぞっ！……！」

と反論をするが、

「箒が引つ越した後に知り合ったから、会わなかったのは当然だよ」

「まあ、あんたが知らないのは無理もないわ、ファースト」

火花を散らすかと思えば、鈴はやりわりと視線で返している。この余裕が少しムカついた箒とセシリアだった。

「少し、前後してしまっただけど、紹介するね。鈴、この子達が、私の幼馴染の箒とクラスメイトのセシリア」

「私が篠乃之箒だ」

「ワタクシがセシリア・オルコットですわ」

二人の様子にまるで鈴を牽制するように一夏は見えた。何故かは、分からないと思いたい……

「さっきも言っただけど、凰鈴音よ。よろしくね、二人とも」

二人に対して、やりわりと言葉を返すのだった。やっぱり、この余裕が少しムカついた二人であった。

一夏は、更衣室で自身の専用のスーツに着替えていた。

一夏のISのスーツは、ダイバースーツのようなものであり、それそのものが一種の戦闘スーツでもある。

ピッタリとしたラインは、ISを操縦した時の意思を伝達しやすいようにするためだ。

当然のことながら制服を脱ぐ。制服を脱ぐとピッタリとした黒いシヤツが現れ、それを脱ぐと小振りな女性の乳房が姿を現した。

女でもある一夏だが、基本は男で通しているため、自身の胸をこうして隠しているのだ。姉からは、形が崩れないよう下着を付けるように言われているが……

「箒と一緒にいた頃は、あまり気にしなかったのに……」

自分の身体の変化について、一夏は少しだけ考えた。自分が、男でも女でもないことは幼い頃から分かっていた。

男のように活発でもなかったし、かといって女のように話好きでもなかった。そして、男女の恋愛というのが、よく分からないことも……

” 織斑君って、変だよ……男の子なのに、女の子みたいだし……！！！！”

” それって、気持ちが悪いよ……！！！！”

幼い頃、好きだといった女子が居たが、その好きがよく分からなか

った。あの子は、どうなったかは知らないけれど…自分のことなど覚えては居ないだろう。

「お前も厄介な星の元に生まれたのは、俺も良く分かっている。だが、お前は、お前だ」

ヴリルが、一夏的心情について声を上げた。女でもある一夏を氣遣ってか、正面を向かずに顔を後ろに向けている。

「分かっているよ、ヴリル。また、誰かに”気持ち悪い”と言われるのかと思うと、少しだけ、気が弱くなってしまう」

珍しく弱気な一夏であった。普段は、それなりに堂々としているが、男女の恋愛となると一夏は非常に”弱い”のである。

一夏の脳裏に、自分の体のことを知らない筈とセシリアの顔が浮かんだ。そして、自身の事を姉と同じくらいに知る鈴の顔も……

一夏

私は、男女の恋愛が良く分からない。それは、私自身がどちらでもない心と身体をもっているからだだろうか。

中学の頃は、修行中と魔戒騎士に成ったばかりだったから特にそういった話はなかった。私自身が少し殺気立っていたから、鈴と弾以外に誰も近づこうとはしなかった。

弾とは、女に絡まれていたのを助けたのがきっかけだった。私のことを”女”と思っていて、学校で男子用の制服を着ていた私を見て酷く驚いていた。女でもあるので間違いないのだけど……

鈴は、私がIS”中性”であることを知っている。きっかけは、中学に上がる前に私の胸を鈴が面白半分に触ってくれたことだった。

あの時の私は、酷く心を乱してしまった。修行中じゃ、こんなことはなかったのと思うぐらいに……

姉が家に居ないので、師匠の下にいつてしまった。

”一夏、俺は男だから、こういう事にはあまり役には立てんと思うが、鈴と向き合ってみるのが一番だな。誤魔化したら、それだけお前が辛い思いをするからな”

師匠の言葉通り、翌日、鈴に私の”身体”の事を打ち明けた。鈴は驚いたが、直に笑顔で

”別に悪いことじゃないわよ。一夏は、一夏じゃない。たとえ、男でも女でもね”

私を受け入れてくれた。それ以来、私が女でもあることが分かった、女としての話題を持ちかけるようになった。

服であったり、歌、時には化粧すら教えてくれた。まあ、私がさせられていたのだが……

一年前、私の不始末で迷惑をかけたが、それでも鈴は私のことを受け入れ、支えようとしてくれていた。

魔戒法師になるため、閑岱へ旅立つ日に

”一夏、アタシはあんたのことが好き。この好きは、友達としてじゃない。恋愛でアタシが好きなの”

”あんたが恋愛がよくわからないのに、こんな事を言って、困らせたいわけじゃない。もし、あんたが恋愛を理解して、アタシ以外の誰かを好きになっても、アタシの想いを忘れないで”

あの言葉に私は応えられるだろうか？ いや、今は応えられない。私は……まだ、何も分かっていないのだから……

こんな半端な気持ちで、鈴の想いに応えても、傷つけるだけだから……

場面は変わり、午前最後の授業は、ISの基本機動を行う授業が始まるうとしていた。

ただ、ここに一人だけ服装の違うものが居た。凰鈴音である。一人だけ、ジャージ。

IS学園の実習用のIS用スーツを買っているのだが、まだ届いていないのである。

一人だけ浮いている鈴を箒とセシリアがジト目で見ていた……

鈴

さつきから、アタシを箒って子が見ている。何か聞きたいことがありそうだけど……一夏との関係ね。

あの外人もそんな感じね。あいつに惚れるなんて……

箒って子は、知らないかもしれないけど、一夏はあんたの事を本当に大切に思っていたのよ。

それが、恋愛かどうかと言われると少し違うけどね。

一夏は男でも女でもある”中性”だ。この”女尊男卑”中、女で居るほうが良かったのに、一夏は、男で居た。

その理由を聞くと、私よりも前に出会った”女の子”といつか再会

するためだと……

”私と箒は、いつか必ず再会すると約束をした。再会したとき、私が”女”だったら、箒を驚かせてしまう”

その外見でそんな事を言っても全然説得力なんてないわよと言ってやった。

六年も経てば、忘れろと思うけど、一夏と箒はお互いに忘れなかったから、案外両思いかも思っちゃった。

でも、二人は互いにまだ歩み寄れない。一夏の事を聞いて、どう思うかな？もし、”気持ち悪い”なんて、言ったら、アタシがぶっ飛ばしてやるんだからねっ！！！！

その一夏が、最後にクラスメイト達の元へ小走りできた。

「すみません。少し、遅れました……」

一夏が来たと同時にクラスメイト全員が振り返り、その姿に全員が見惚れてしまった……

「なにっ？あのスタイルのよさ……」

「ほんとに男？」

「実は、女の子じゃないの？」

「織斑先生より、細いか…」バシッ！！”あべしっ！？！”

「あの綺麗なライン…………私の寸胴と交換して欲しい…………」

彼女のらの視線は、一夏のボディーライン全体を嘗め回すように向けられたのだった。

一夏は、女子達の視線に居心地の悪さを覚えていた。特に、自分の”脚”、”くびれ”、”胸”による視線は正直、恥ずかしいと感じていた。

「箒、羽織るものないかな。ちょっと……………恥ずかしい」

「男の癖に何を恥ずかしがっているっ！！！！普通、逆だろっ！！！！」

一夏は顔を少し赤くして箒に頼るが、彼女は一夏を突き放した。これも”IS”によって、男女の価値観が歪んでしまったのではないかと、箒は思った。

（これが、最近の”草食系男子”というものなのか）

これが、いかつい男なら引いたが、見た目が女の一夏では、違和感がない。

「仕方ないわね。あんたは、肌を人前にさらすの、極端に嫌がるもんね」

鈴は、何処から持ってきたのかジャージの上着を一夏に手渡し、一夏はそれを羽織った。

「ありがとう、鈴」

ジャージを羽織る一夏に鈴は苦笑する。

(……一夏って、女でもあるんだけど、もしかしたら、アタシより女らしいところがあるかもって……一夏は女だから、変じゃないよね。)

一方でセシリアは、頬を引きつらせて

「……一夏さん。あなたは、間違いなく”女の敵”です」

ここでも、敗北してしまったセシリアであった。自身のスタイルもそれほど悪くはないはずなのだが、一夏のそれと比べると見劣りがしてしまうのは、自他共に明らかであった。

間もなくして千冬と真耶が生徒達の前に立ち、

「これより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、試しに飛んでみる」

「わかりましたわ」

千冬に応えるようにして、セシリアは青いボディーが特徴的なブルー・ティアーズを展開する。

「……………」

一夏は、左手首のブレスレットを掲げて蒼い狼の顔を持った蒼牙を展開した。

その時に、羽織っていたジャージが舞い、鈴の手元に戻った。

赤い鬘を靡かせるその姿は、威風堂々としたもので、近くで見ると、のに軽い威圧感を与える。

「織斑。そのバイザーは仕舞っておけ」

蒼牙の顔が気に入らないのか、口を出す千冬。今は、授業中なので、大人しく指示に従い、バイザーを仕舞うのだった。

現れたのは、姉そっくりの顔である。

「よし、飛べ」

その合図に合わせるように一夏は、地を蹴って跳び上がった。

「織斑っ！！！！誰が地を蹴って跳べと言ったっ！！！！ちゃんと、飛行しろっ！！！！」

千冬が教師として、厳しく指導する。

「……うっかりした」

「おいおい、しっかりしてくれよ。授業参観で見ているこっちの期待にも応えてくれよ」

一夏は一夏で、いつものように振舞ったことである。ヴリルは、ヴリルで少しだけ苦笑いをしていた。

「い、一夏さん。随分とユニークな飛び方をされるんですね……」

地を蹴って跳び上がるのをセシリアは、少し引きつりながら話しかけた。

「……まあ、いつものくせで……」

一夏も一夏でどう応えていいのか良くわからなかった。飛行をしなければ、話にもならないので、蒼牙の翼を展開して一気に飛翔した。

「凄いわね。一夏……めちゃくちゃ、上手いじゃん」

鈴は、蒼牙を展開し飛行する一夏を見てそう呟いた。蒼牙は一気にIS学園を見渡せる高さまで飛行し、風と戯れるように上下左右を舞う。

「……………」

箒は、あの遙か空の上を舞う一夏の居る場所と自分との位置がそれだけ離れているように思えた。

いや、もしかしたら自分と一夏は、交わることはない違う世界で生きているようにも……

そう思うと、少しだけ寂しく思えたが、自分と一夏はこれから始めればいいと思い、気を引き締めた。届かないのならば、あの場所へ届けばいいだけのことだからと……

IS学園上空

「皆は、いい印象は持っていないISだけど、空をこっぴつ風に乗るの、凄く好きになれる」

「ああ、そうだな。なんで、こいつは女にしか動かせないのかね？」

「それを言うなら、ソウルメタルが男にしか扱えないことを言うのと同じだよ」

一夏は、蒼牙を見事に制御していた。ISの制御は、思考によるものでありイメージなのだ。

ISと少しだけ制御の方法が似ているのが魔戒騎士達が扱う”ソウルメタル”である。

これは、持ち主の心の在りようでその重さを変えるため、”ソウルメタルは、力でなく、心で扱え”という格言があるのだ。

ソウルメタルを扱うのは、かなり難しく、ほとんどの騎士が数年を掛けて、扱えるように師の元で学ぶのだ。

一夏もソウルメタルを操れるまでは、かなり苦勞をしている。それこそ、語りつくせないほどの”努力”を行ってきたのだから……

そのソウルメタルと比べるとISの操縦はさほど難しくは無かったと言っのが、一夏の感想である。

「もう少しだけ、高く飛んでみたいけど……さすがに今は、難しいかな」

「まったくだ。こいつで、月まで行くんだろ、ジュール・ヴェルヌの世界だ。ほんとに大したもんだ、ISってのはよ」

「一夏とヴリルは、遥か上空に存在するであろう」未知なる世界”に少しだけ思いを寄せた。

それだけに残念な思いもある。本来ならば、未知なる世界への翼と成るべき”IS”は、国家の武力として、さらには、女しか扱えない強大な力として”女尊男卑”の陰我を生み出した元凶となっている。

「いつかは、俺も行ってみてえな。宇宙によ」

魔道具初の宇宙飛行をしたいのだろうか？他の魔道具はどう思うだろう……

「い、一夏さん。お待ちになってくださいませ」

下を見るとセシリアが、息を切らすようにして自分に追いついてきた。

「ああ、すまない、セシリア。少し、飛ばしすぎた」

「ええ、良いものが見れましたから、構いませんわ」

「良い物？」

「いえ、ワタクシの勝手な感想ですので、一夏さんはお気になさらなくて良いですわ」

セシリアの言葉に一夏は首を傾げたが、彼女は微笑んで、それ以上のことは言わなかった。

セシリア

ほんとうにISを二ヶ月ほど動かしたただけですかしら？遙か上空の雲に届くところまで飛ばれるなんて……

ワタクシだって、このブルー・ティアーズを専用機とするまで、それこそ語りつくせない努力をしましたわ。

あの方は、それを二ヶ月足らずとあそこまで”IS”を動かせるなんて……

上空を舞う一夏さんは、何処か楽しそうにも見えましたわ。まるで、空を舞う”天使”のように……

ワタクシは一夏さんを”騎士”と思いましたが、あのように空を舞う姿は、”天使”ですわ……

”騎士”は、身近のものを主を護るために己のみを捧げるといいますが、”天使”は、ワタクシ達とは違う世界を生きる生き物です。

一夏さんがもし、”天使”なら、ワタクシと一夏さんは住む場所が違う事を意味します。もしかしたら、そうなのかもと思ってしまいます……

今のこの距離が、ワタクシをそう思わせているのでしょうか？ワタクシは、一夏さんのことが知りたい。だから、傍に近づけるように、進まなくてはなりませんわっ！！！！

「一夏さん、ISで飛行するのは、楽しいですか？」

セシリアは、一夏に問いかけてみた。

「……………こうやって空を飛べる感覚が凄く楽しいかな」

一夏は、本当に楽しかったのか、笑みを浮かべて応えた。その笑みが綺麗なのかセシリアは、少しだけ頬を赤くしてしまった。

「…………あの、よろしければ一緒に訓練でもいかがですか？ワタクシも一夏さんのように接近戦と遠距離戦をうまくこなせるようになり

セシリアの考えはもつともである。一夏の駆る蒼牙は、雪片を用いた接近戦と弓を用いた遠距離戦を主体としている。

「それなら、セシリア。私からもお願いをしたい。よろしくおねがいするよ」

いきなり通信回線に怒鳴り声が割り込んできた。

遙か上空から離れた地上もISのハイパーセンサーを使えば、鮮明に見える。

「了解です。では、一夏さん、お先に」

255

「さすがは、代表候補生ってところだな」

ヴリルがセシリアの技術に感心したように呟いた。

「それでは、私も続けとする」

「おおっ！！行つて来いっ！！！」

続いて一夏が蒼牙の六枚の翼を展開して、地上へと向かう。こちら
も難なく、地表10センチで停止した。

放課後、授業が終わり、一夏と分かれた鈴は食堂に来ていた。箸と
セシリアの二人と同席していた。

「凰。私達に何のようだ？お前から、誘ってくるとは……」

「そうですね。ワタクシはこれから一夏さんと有意義な訓練の時間
ですよ」

セシリアの言葉に、筈は一瞬、青筋が立ったが、直ぐに気を取り直して鈴と向き合う。

「そうね。ぶっちゃけ、聞くけど、あんた達、一夏のこと好きなんでしょ？」

意外過ぎた言葉に対して、二人は顔を赤くして

「な、何を言うんだっ！？！？」

「そ、そうですわっ！！！！！！！物事には順序がありますのよっ！
！？！？」

この反応を見て、やっぱりと思う鈴だった。一夏は何気にもてていた。

（そういえば、弾の奴も一夏が女でもあると知ってから妙に意識していたわね）

中学時代の友人もそうだが、近寄りがたい雰囲気を持つものの何気に優しくった一夏を意識するものは多かった。

事情を知らない男達から一夏は”高嶺の花”と呼ばれていた。意味、手が出せない。男だから……

「アタシは、好きよ。一年前に告白だったから……」

「なっ！！！！！！」

「何ですってっ！！？！！」

鈴の言葉に箒とセシリアは、声を上げてしまった。近くに居た生徒たちも鈴に注目している。

「まあ、今は一夏の返事待ちよ。あいつを困らせたくないしね」

少しだけ笑みを浮かべた後、真剣な表情で箒とセシリアに向かい

「あんた達二人が一夏の事が好きだとしても、絶対にあいつを困らせないで。あんた達の都合で振り回して、傷つけるなら、絶対に許さないから……」

「な、何を言っているんだっ！！わ、私は、幼馴染だ。一夏のこととは誰よりも知っているんだぞっ！！！」

箒が鈴に反論する。それに対してセシリアは箒のように反論ができなかった。なぜなら、セシリアは一夏とまだ知り合ったばかりだから……

「そう……でも、今の一夏の事を知っている人は、アタシと千冬さんぐらいなものよ」

「な、何を言っているんだ。一夏は、私の幼馴染だっ！！！！あの頃のままだっ！！！！！」

声を上げる箒に鈴は、本当に一夏に入れ込んでいるものだと感心してしまった。だが、二人は知らない。一夏が二人が知らない世界へ身を置いていることに……

「そうなら、もし一夏に普通とは違う違和感を感じても絶対に詮索しないことね。もし、それを詮索して、”絶望”をしてもアタシは一切手は出さないわ」

鈴は、思わず目に怒気をこめてしまった。この時、発せられた威圧感是一般人を軽く威圧するものだった。箒とセシリアも思わず、怯えてしまうほどに……

「アタシ程度にびびるようじゃ、一夏の傍には居られないし近づけないわよ。半端な想いなら、やめたほうがましよ」

そういつて、鈴は席を立つて二人から離れた。二人は、ただ呆然と鈴の背を見送ることしかできなかった。

セシリア

二人とも、ずるいですわ!!!!ワタクシだけが置いてけぼりです!!!!!!

知らないのなら、これから知ればいいだけのことですわっ!!!!!!

あなた達と違って、スタートラインは遅いですが、絶対にワタクシ、セシリア・オルコットは負けませんわっ！！！！

第

一夏が私に対して、何かを悟らせたくないようだが、それは何なのだ？

一夏、絶対にお前からそれを聞き出してやる。鳳、お前には絶対に負けないからなっ！！！！

この時も私はやはり六年前と変わらない餓鬼だった。一夏が何を行っているかなど、考えもしなかった。

一夏の事を考えずに、自分のわがままを通そうとしていたのだ。それに気づいてすら居なかった。

あの人と千冬さんすらが恐れる”闇”がこの世界に至る所に存在していたことを……

その”闇”がこのIS学園に迫ってきていることを……………

第漆話「鳳鈴音」（後書き）

こちらの鈴は、原作と違い千冬さんに対して強いです（笑）

今回は、ISによる戦い、ホラーとの戦闘は無しですが。鈴と烈花の絡みを書いてみました。

鈴は、あの曲を演奏できます。

原作と色々の違い今回は戦闘もなしですが、次回は原作よりも早くにあの娘を登場させます。

一夏の一年前の出来事ですが、これは原作で言う第一巻が終わる頃に番外編的な感じで出してみたいと思います。

今回は、一夏の少しナイーブなところを出してみました。恋愛に関しては、少し臆病です。此処の一夏は……

それでは、次回予告を…

何事にも決して超えてはならない一線がある。

その一線を越えたとき、全てが崩壊し、今まで通りではなくなる。

それを警告する警鐘を決して、無視するな。

次回！「踏み切り」

その一線を越え、あるべきだった”日常”を知らずに壊してしまっ
た”誰か”を俺は知っている。

第捌話「踏み切り」（前書き）

前の投稿から、随分と間を空けてしまい申し訳ありませんでした。

一週間前に風邪をひいてしまい、声が二日ほど出せなくなっていました。

今週のGARROは、零がメインの回でした。

個人的に零こと絶狼は好きなキャラなので、久々に見えてよかったです。

今回のホラーは、人間をたぶらかしていたんですが、人間の方がホラーのを見せていた幻に心を奪われて、今を生きることが放棄してしまった所は、何とも物悲しいものでした。

零にとっても、つらかったんじゃないのかなと思うところがありました。

それでは、どうぞ!!!!!!

第捌話「踏み切り」

放課後

鈴を見送ってからセシリアは、急ぐように第三アリーナへ向かっていった。

理由は言うまでもなく、自身が思いを寄せる男性 織斑一夏の元へ一刻も早く行きたかったからだ。

（ずるいですね。篠乃之さんも鳳さんも……ですが、ワタクシも負けてばかりではありませんっ！！！！）

先ほどの鈴の話を聞いて焦り、彼女は少しでも一夏と触れ合い、彼を知りたかった。

初めてかもしれない感情に任せるがままに彼女は走る。セシリアに鈴の警告は、届いていない。

一夏が抱えている”闇”を知るとは、彼女の日常が崩壊し今までどおりに過ごす事が叶わなくなる事を知らない……

それでもセシリアは、一夏を想う事ができるだろうか？

その頃、第三アリーナでは、既に一夏が蒼牙を展開して飛行訓練を行っていた。

接近戦を主体としているだけに、高速戦闘を得意としている。六枚に翼を使い、アリーナを舞う姿は華麗の一言に尽きる。

雪片を振るい、弓を使つて的を射るという訓練をひたすら繰り返していた。

「おい、一夏。これって、ゲームって奴か？」

「一応は、訓練の一環だけれど……確かにそれに近いな」

訓練の内容を見て、ヴリルが思わず口走ったのに一夏が言葉を返す。

ISの活躍の場は、ルールにのつとつた競技で競われる。見ようによつてはゲーム、もしくはショーに近い。

「最強の兵器だと世間では言われているが、こうしてみると何かのファクションか、スポーツの道具にしか見えんな」

ヴリルは、IS学園の生徒と話す機会はないが一夏越しに見てみるとISは兵器というよりも、女性にとって何かのステータスに抑えられているように思えたのだった。

「これを皆が見たら、何と思うかな？」

一夏はISの競技について、仲間である他の魔戒騎士はどう思うだろうかと考えるのだった。黄金騎士辺りは”興味はない”の一言で済ましてしまいそうだ。

今は、セシリアとの訓練を約束をしているので彼女が来るまで待つことにするのだった。

一夏の様子をアリーナの客席から一人の女生徒が見ていた。

少し垂れ目の可愛らしい顔立ちの少し袖の長いIS学園の制服を着ている。

布仏 本音

すごいな。おりむー、専用機も凄いいけど、心身ともに強いおりむーには、憧れるな。

やっぱり、お姉さんが織斑先生だからかな。だから強いのかな、私とは違うんだよね。

私にもお姉ちゃんが居るけど、お姉ちゃんの妹としては凄く情けない。

私のお姉ちゃんは凄く優秀だ。専用機持ちほどではないけど、何事もテキパキとこなす。

それに比べて私は、のんびりしていて、悪く言えばトロイ。

おりむーは、お姉さんの事をどう思っているのかな？

世界的に有名な、雲の上の人と一緒に居て、辛くはなかったのかな。

優秀なお姉さんと比べられることを……

かんちゃんも私と同じように辛い、いや、かんちゃんの方がもっと辛い思いをしてた……

だって、かんちゃんは”更識楯無の妹”としか見られていなかったから……

本音がそう思っていると、いつの間にかピットからセシリアのブル
ー・ティアーズが飛び出していた。

そこは奇妙な空間だった。様々な線路が無尽蔵に引かれ、あちこちに墓標のごとく警笛を鳴らす踏切が存在していた。

あたり一面を警笛が鳴らされ、赤く点滅するランプによりそこに迷い込んだ”人間”の不安な表情を照らす。

「な、なによっ……何なのよっ！！！！ここはっ！！！！」

自分は先ほどまでショッピングを楽しみ、これから家路に着くためのモノレールに乗った途端にこの奇妙な場所に迷い込んでしまったのだ。

線路の上に佇む彼女を見下ろす影が対向車線の線路から歩いてくる。

「おやおや、お嬢さん。あなたも一線を越えられますか？」

対向車線から歩いてきたのは、駅長の制服を着た初老の男であった。

「一線って何よっ！！私が何したって言うのよっ！！？」

イラついていたためか、女性は八つ当たりをするように男に食って掛かった。

「それより、此処は何処よっ！！？！どうやったら、出られるのよっ！！？！」

「フム、君はここに来て引き返すというのかね？ならば、選ぶがいさ、ここから引き返す道かこの先の一線を越える道かを」

「何よっ！！？！それ、ふざけてんじゃないわよっ！！！役に立たないのならっ、あんたがやってきた道を辿れば戻れるんでしょうがっ！！！！！」

女性は鼻息を荒くして、男を押しつけて道を進む。

「おや、お嬢さん？そちらへ行かれるのですか？そちらを越えては、あなたは戻れませんよ」

その言葉が届くはずもなく、女性は奇妙に交差した線路の上に来ていた。

「何よ此処は？どこに帰り道が……」

その瞬間、女性は前を見た。そこで、奇妙な形をした機械とも生き

物ともいえないものを見てしまった。

「きゃああああああああああああっ!!!!!!!!!!」

辺り一帯に蒸気が立ち込め、女性の身体が霧散するようにして消えていった…………

「だから言ったのに…………あなたは戻れないって…………」

いつの間にかその場にたたずんでいた車掌の瞳に魔界文字が浮かび上がった。

「まあ、どのみち、戻すつもりはなかったがね」

意地の悪い笑みを浮かべて、彼はその場にたたずんでいた……………

IS学園 食堂

「…………一夏。お前、その量を食べるのか?」

箸は信じられないモノを見るかのように、目を丸くしていた。

「うん。此処のところは、多めに摂っておかないと身体が持たないんだ」

一夏の持つているトレイには、大盛りのご飯とかなりの量のおかずが載せられていた。

食が細かいかと思われていた一夏だが、朝はきつちりと取る為にかなりの量を食べる。

「朝は、一日の基本だ。これぐらいは普通だと思っけど……」

「す、凄いね、織斑君。さすがは、男の子？かな……」

「……この量であのスタイルをどう維持できるの？」

「……女の敵め」

「くつ、私なんか、量を減らさないと体重が増えちゃうのに……」

一夏のトレイを見て、女生徒達はそれぞれの言葉を吐いた。

一夏のスタイルの良さは、既に広まっており、「女の敵」と認知されている。あの織斑千冬よりも細いという話も……

一夏の姿は、女が男装をしている感じでかなり倒錯的である。声もハスキーな千冬と比べると、かなり女らしい。千冬の声のほうに聞こえようによつては男に思えるかもしれない……

制服越しからも分かる身体の細さに、女生徒達は溜息をつくしかな

かった。それを見て篤は、

「あの身体の何処に、この量がいいるのだ？」

「何言つてんのよ。ちゃんと食べないと、この先きついわよ」

続いてきた鈴もかなりの量を探っていた。朝から豚骨ラーメンとチヤーハン大盛りである。

「こいつもこいつで……」

この小さな身体の何処に納めるつもりだろうかと疑問に思う篤だった。

「ねえ、おりむー。一緒に良いかな？」

そこへ少し間延びした声が挟んできた。布仏本音である。

「構わないよ。布仏さん。おりむーって？」

「あ、おりむー。私のことを知ってたんだ。織斑君よりもおりむーの方は馴染み易いと思って……もしかして嫌だった？」

「……別に構わないよ。私自身、そういう風に呼ばれたことはなかったなので、少し戸惑ってしまったただけだ」

少し不安な表情を見せた本音を安心させるように一夏は笑みを浮かべて応えた。

「一夏、あんたも笑うようになったわね。少し前までは、アタシや

身内以外に笑い掛けるなんて、そうそう無かったのに……」

鈴が一夏と本音のやり取りを見て、驚いていた。一年前の一夏は、少し殺気立っていて人を寄せ付けず、このように笑いかけるのは考えられなかったからだ。

「鈴。一年も経てば私も変わるよ、四六時中気を張るよりも、こういう時ぐらいいは穏やかに居たいからね」

「ふゝん。何だか、零さんみたいな事を言うのね。そういえば、千冬さんと喧嘩をしていた時は、一時的に一緒に住んだのよね」

一年前に自分の家族を救ってくれた恩人の事感慨深く鈴は思い返した。生真面目で愛想の無い魔戒騎士の中では珍しく笑みを絶やさない銀牙騎士 涼邑 零。

鈴はあれから彼とは会っては居ないが、今日も何処かで護りし者として剣を振るっているだろう。

「一緒に住んでたどっ！！？！一夏っ！！！貴様っ！！！男と同棲していたのかっ！！？！？」

二人の会話を誤解したのか、箒が青ざめた表情で叫んだ。

（ま、まさか…一夏は、そっちの気があるというのか？）

鈴の言っていた事はこのことなのかと箒は、絶望したような表情だった。

「……………箒。零さんとは、そういう関係じゃないよ。私は、これで

も”男性”だから…気にするなら”女性”にしたい……」

「そ、そうか…よ、良かった。お前は見た目がそれだからな」

(…一夏。あんたは女でもあるんでしょ。その台詞は、少し危ないわよっ…!)

インターセックスの一夏は、男でも女でもあるので恋愛をすれば同性であり、異性であるというなんともややこしいことになるのだ。

「お、おりむー。どうして、お姉さんと喧嘩をしたの？」

「ああ、うまくは話せないが。意見がかみ合わなくなって、私の方から飛び出してしまったんだ」

「な、なにっ！？千冬さんと喧嘩しただけに飽き足らず飛び出したっ！？！お前は、何をしていたんだっ！？！」

「ええっ、飛び出したって！？！どういうこと！？！」

古くから千冬と一夏の関係を知っている筈は、二人が喧嘩する事はないというぐらいの仲のよさを知っていたが、そんなことになっていたとはと驚いてしまった。

一方の本音も千冬と一夏の仲の良さは、普段の二人の振る舞いを見ればよく分かっていたが、まさかそこまでの大喧嘩をしていたとは思わなかったのだ。

「これは、私自身のことだから話すことはできないけど、姉さんにとって、私のやろうとしていたことが許容できなかったんだ」

「そうよね。千冬さんって、かなり過保護だしね」

鈴が一夏の言葉に付け加えるように口を挟んだ。

「千冬さんが許容できないこととは、一体なんだ？」

箒は、重要となるその辺を聞き出そうと質問をするが

「すまないけど箒。こればかりは言えないし、箒を関わらせたくない」

「な、なんだと……」

思わず声を上げそうになるが、一夏が箒の知らない”怖い目”を向けてきたのだ。本音は、位置の関係で見えなかったが……

「そうなんだ、おりむー。お姉さんの事、どう思うの？だって、お姉さんは、凄く優秀で有名なんだよ。そのことで何か言われなかったの？」

「そうだね。姉さんの弟だからって色々言われたこともあるけど、私自身を大切にしてくれる姉さんをその事で、文句も言えなかった。

ISに関わってから、滅多に家に帰ってはこられなくて、私も寂しかったけれど、姉さんはもっと寂しがっていたかな」

「ええっ！？！織斑先生って、寂しがり屋なのっ！？」

「姉さんは、ああ見えて誰かに構って欲しいと思っているところが

あるし、一人で居ると用も無いのに私に電話かメールをしてくるともあるしね」

一夏は、千冬と瓜二つなその顔に千冬自身が絶対に人に見せることの無い笑みを浮かべて

「姉さんは、雲の上の人かもしれないけれど私にとってはたった一人の姉で、私しか知らない可愛い一面も知っているから、姉と比べられても怒るに怒れなかったかな」

「……そうなんだ。おりむーは、ねえ、もし『いつまで食べているつもりだっ！！！食事は迅速に効率よく摂れっ！！！！』」

ここで、一年の寮長である千冬の声が響き渡った。気がつけば、かなり話し込んでいたようだ。

食堂に居る面々の食事を取るスピードが上がる。

「遅れたものは、グランド十週だっ！！！！」

「大変だよ。ここのグランドは一周がすごーーーーーくあるから」

本音もいつものんびりとした雰囲気を廃して、急いで食事を取る。

「まったく、もう少しゆっくりさせてよ。食事ぐらい」

あの厳しい烈花でも食事ぐらいは、ゆっくりさせてくれたぞと言いたかったが、何も言えずに鈴も急いで平らげるのだった。

一夏も一夏で食事を終わらせ、急いで授業へと向かう。

そんな一夏たちに視線を向ける千冬は少ばかり晴れやかであった。

（ふふふ、一夏。その微笑みは間違いなく私似だ。もっと笑えよ）

普段から強面であることは、千冬はよく理解している。偶に笑えば、お地藏さんのようだと言われ、石の様に硬い笑みだと言われる。

一夏の笑みは、まさしく自分の理想としているモノだ。血の繋がった弟？の微笑み。姉である自分の微笑み。

「偶には、私も笑ってみるか」

その後、授業で生徒達に微笑んだのだが、逆に気味悪がられてしまい（特に真耶）、内心落ち込んだのは言うまでもなかった。

第

何だ、何だ？一夏の奴……、私に何も言わないとは、関わることじゃないとか、お前は私を拒むのか？

それに鳳が、私の知らないことを知っているのがイラつく。

これでは、凰に先を越されてしまうじゃないか。私は、まだ一夏に思いを伝え切れていないのに……

あいつは返事待ちでと言っていた。一夏が私以外の誰かと一緒になるのは嫌だ。

今までもずっと一夏を想ってきたんだ。あの頃からずっと……ずっと……凰よりもずっと前から……

分かっているが一夏は、私に対して恋愛という感情を抱いては居ない。一夏が私に抱いているのは、友情に近い親愛だ。

だけど、私は一夏と一緒にになりたい。だから、この想いを告げて、一夏と……

IS学園 整備課

学園にあるISを整備し調節する施設の一角に一人の女生徒が、一心不乱に最新式の空間ディスプレイに移る映像を見入っていた。

映像は、数日前に行われた一組のクラス代表決定戦である。そこに

映る赤い鬘を持った蒼い狼のバイザーをつけたIS 蒼牙のデータを自身のISと比較していたのだった。

長方形の眼鏡を掛けた女生徒の名は、更識 簪。ISの日本代表候補生である。専用のISは、打鉄式。

簪

すごい…おそらくは接近使用であるが、遠距離と近距離の切り替えが早く、相性の悪い遠距離攻撃を主体とするIS相手にも遅れを取っていない。

使っている武器は雪片。かつて”ブリュンヒルデ”織斑千冬が使っていた”唯一の武器”。その弟の織斑一夏が使っている。

この戦闘スタイル、技量を見る限り国家代表とも互角に渡り合えるかもしれない。

……やっぱり姉が優秀なら、弟も優秀なの？私と違い……

私の姉は、更識楯無。この学園の二年生であり、生徒会長、そして唯一の国家代表だ。

一歳上で私を遥かに上回る才能を持った姉だ。いつも私よりも遥かな先を行き、周りの期待に応えていった。それに比べて私は、周りの期待に応えられずに”どうして、あなたは姉と違うの”と期待を裏切ってしまった。

勉強、武術に関しても優秀な成績を収め、さらにはISの作成すら自ら行ってしまった。私にはできない事ばかり……

織斑一夏は、男性であるためISに触れる機会などなかったはずなのに、選抜かれた代表候補生を倒してしまった。

いくら、あのブリュンヒルデを姉に持つからといって、できることじゃない。やっぱり、優秀な姉には優秀な弟でなければならぬのだらうか？

もし、私に織斑一夏のような”才能”があれば……きっと、”楯無の妹”じゃなくて、更識簪としてみてくれただらう。

現に織斑一夏は、世界で唯一の男性のIS操縦者、”ブリュンヒルデ”織斑千冬の弟ではなく、”織斑一夏”として認められているのだから……

四組の教室でも噂はよく聞く。”生真面目で勤勉家”、”男？というよりも寧ろ女”、”女の敵”、”プロポーションは、姉よりも優れている”。

とよく分らないが、彼はこの学園の話題によく上がる。ISの操縦もそうだが、織斑一夏の”美貌”があがることが多い。それは男としてどうなんだらうか……

遠めにしか見たことがないが、織斑先生に瓜二つの外見だというのは知っている……

一度、話してみたい……優秀すぎる姉を持つ者同士で……

放課後

一夏と鈴は学園の周囲を回っていた。ある一定の間隔で赤い符を目立たないところに貼り付けていく。これは、学園にホラーが入ってこれないようにする為の策である。

「一夏、何なのよ此処は。下手すれば陰我のゲートになりそうなのはつかじやないの」

一夏と鈴が学園を散策するたびに見つけたものを見ては、封印を行ったが、その数かなり多いのだ。

「ヴリルも言っていたけど、此処には陰我の要素がかなり多い。姉さんは、ここにホラーは現れないと考えていたみたいけど……」

「そうね、アタシも言われたわよ。ここには、アレは現れないって……でも、直ぐ近くまで来ていたのよね」

二人は、IS学園の向こうに見える都市に目をやった。あの都市に

は多くの陰我が存在しているのだ。

「まったくだぜ。あの”白騎士事件”でISの”力”が証明されてから、こんだけ経っているのに、今までIS学園に現れなかったのが不思議だったんだぜ」

ヴリルが二人に同意するように口を挟んだ。

「”白騎士事件”ね。何で、あんなことをやったのかしら……あんな事をしなくても他に道はあったはずなのに……」

鈴は、自身の家族を滅茶苦茶にした原因である”ISがしでかした事件”に対して吐き捨てた。本来は、宇宙での活動を目的としたパワードスーツなのに…それを兵器としての”力”を見せ付けたことに対して……

白騎士事件

IS発表から1カ月後に起きた事件。日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピューターが一斉にハッキングされ、2341発以上のミサイルが発射される。

その約半数をIS「白騎士」が迎撃した上、それを見て「白騎士」

を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器を撃破した事件。

この時の死者は皆無だった。この事件以降、ISの関心が高まることとなる

「あんな事を起こさなければ、ここまでホラーも多くは出てこなかったはずなのよね」

”女尊男卑”による陰我。ISの力によって齎されたモノ。その陰我も様々な形が存在しているが、これによって、ホラーが大量に現れるようになった。

思い上がった女性の虚栄心、その女性へ復讐するためにホラーの呼びかけに応える男性、理不尽な理由で家族を奪われた者などの心の陰に付け込みやすくなっている。

「千冬さんも篠乃之博士も、思い上がりすぎよ。あの時ISの力で何でもできるみたいに考えていたのかしら」

「鈴」

「あの白騎士事件は、世間じゃ謎だって言ってるけど、魔戒法師や

番犬所は、事件の犯人が誰か分かっているわよ」

鈴は、再び符を貼り付けてから、次の場所へ足を進めるのだった。

一夏

白騎士事件。アレは、束さんがISを発表してから一カ月後に起こった事件。日本に向けられたミサイルを最初のIS 白騎士が迎撃したというもの……

その白騎士の正体は謎に包まれているが、私は開発者の束さんから聞いている。白騎士の操縦者は姉さんだということを……

発表したISは、そのあまりに突飛な発想ゆえに世間に受け入れられなかった。当然、束さんは腹を立てたが、それで世間の認識が変わるわけではないので、ISを放り出して別のものを作ろうとしたらしい。

だが、放り出したISに目をつけた人が居た。その人が姉さんだった。姉さんは、束さんに”計画”を持ちかけた。それこそが”白騎士事件”の大元のシナリオだ。

”ちーちゃんが、ISで白騎士事件を起こしたのは、私利私欲のためじゃないんだよ。全ては、いっくんが傷つかないように……”

”それに、あそこまで派手にやっちゃったのは、東さんが調子にのりすぎちゃったから……”

全ては、私 織斑一夏の為だった。白騎士事件が起こる前に私は、姉さんに……

”この前、女の子に気持ち悪いって言われちゃった”

”どうしてだろう、好きってのがよくわからない”

”ねえさん、ワタシって気持ち悪いかな？女の子と男の子の好きがよく分らない”

ただ何も言わずに姉さんは私を抱きしめてくれた。気丈な姉さんが少しだけ泣いていたのを今も覚えている。

”何を言う……私にはお前しか居ないんだ。大丈夫だ一夏。私がお前を護ってやる。絶対に、世界にお前を傷つけさせはしない”

だからこそ姉は”力”を求めた。最強であるために……何より私を護るために……そして、踏み越えてはならない一線を越えてしまった……

白騎士の名前は、姉さんが付けた。何色にも染まらない唯一の色。私という男女どちらでもない IS”インターセックス”の私を護る”名前”として……

この話を聞いて、真っ先に思ったのは”余計なお世話だ”と言いたかった。別に私は、姉に最強になってもらいたいと思わなかった。ただ、傍に居てくれるだけで……よかったのに……

ISを得た姉さんは、夢中になれるものを見つけて少しだけ嬉しそうだった。私は、幼いながら姉さんが苦勞しているのは分かっていた。

そんな姉さんが辛いことを忘れられるのならと……姉さんが傍に居られなくなるのは寂しかったが、私はそれでも良かった……

その頃、私は師匠の言う”護りし者”としての生き方に憧れを抱き、今に至っている。

姉さんは、私に魔戒騎士を辞めて欲しいと事あることに言っている。私は辞めるつもりはない。

私のこの手は、姉さんと違って多くの血に塗れている。ホラーに憑依した人間を狩ることは、その人の命を絶つことだから……

人々を護るためとはいえ、罪を犯している事は事実だ。だけど、私は”魔戒騎士”だ。護りし者、闇を照らす希望の光とならなければならぬ。

たとえ、心を、友を……愛を全てを失おうとも……この”信念”だけは捨ててはならないのだから……

夕方の駅にはたくさんの人達が居た。帰宅時のラッシュなのか、皆が皆周りを鬱陶しそうにしていた。

「ったく、これだからこの時間は嫌なんだよ」

一人のサラリーマン風の男が苛立つように目の前に来た列車の窓越しから車内を見た。車内は、やはり人で溢れ返っており、乗車することは困難であつた。

<申し訳ありません。ただいま、人身事故の影響でダイヤルが乱れています。お急ぎのお客様には申し訳ございませんが、今しばらくお待ちください>

聞こえてきたアナウンスに男は、軽く舌打ちをした。この時間は、特に混む時間である。それで、遅れれば暫くは乗れないし、乗れても降りる駅で降りられるわけではない。

苛立った男は、駅のホームから離れた。ここにいるのが嫌になったからである。

男は駅の中の喫煙所で時間を潰そうと考えていたが……

「おやおや、また人身事故ですか。最近、多いですね、このご時世は」

いつの間にか自分の真横に駅長と思わしき人物が立っていたのだ。

「ああ、そんな話は良いんだよ。早く動かしてくれ、言い訳はいからさっ!」

苛立ちをぶつけることができた男は、駅長に食ってかかるが、駅長はやりわりとした態度で

「ええ、あなたにこの一線を越えられる覚悟がございましたら、ぜひこちらの路線をお勧めしようと思ったんですが、よろしいでしょうか?」

「なにっ!?!動いているのかっ!?!」

「はい。私のコネで一般には知られていない路線ですよ。この一線をあなたは、越える覚悟がありますか?」

気が付くと駅には、男と駅長以外の者は誰ひとりとしていなかった。駅長は、男の正面に立ち、足もとを指さす。

「ここが、踏み越えるべき一戦です。どうですか、越えられますか?」

「ああ、何でもいい。早くしてくれっ!!!」

もったいぶるように語る駅長に男は、話を詳しく聞かずに”その一線”を越えてしまった。

「ようこそ、こちらの”世界”へ」

駅長の目に”魔界文字”が浮かび上がったと同時に口から大量の蒸気が噴き出された。

「な、何なんだっ！！？う、うわああああああああっ
……………」

口から吹き出された蒸気は、一瞬にして男を包み込み、霧散するように肉体が散ってしまったのだ。

再び景色は、ラッシュでこった返す駅の風景に戻ってしまった。駅長は、先ほど正面に立っていた男が持っていた鞆を一瞥して、人混みの中へ紛れてしまった……………

翌日 日曜日

一夏は、自身の所属する西の番犬所に足を運んでいた。現世とは違

う異界である此処は一般人が決して立ち入ることのできない。

『一夏、ここ最近は苦勞を掛けますね』

白い衣を纏った若い男が一夏に勞いの言葉を掛ける。

「いえ、特に支障はありません」

『そうですか、お前がISを動かしてから他の番犬所はお前の追放をも叫んでいましたが、我々はある限り、お前のサポートを行うつもりです』

「こちらこそ、苦勞を掛けます」

一夏も頭を垂れ神官に言葉を返した。

「東西南北の番犬所が揉めるのは、仕方ない。最初は、あんたも一夏をいい目で見なかったのに、変わるものだな」

ヴリルが、勞いの言葉を掛ける神官に少し皮肉の言葉を掛けた。

「ヴリル、口が過ぎるぞ」

『その魔道具の言葉は事実だ。一夏、お前の騎士としての覚悟と振る舞いは、まさに魔戒騎士として相応しいもの、それを認めなくて何とする』

「あなたには、手を煩わせてばかりです」

『東に移った”あの男”と比べれば、あなたの方が品があります』

この西に所属していた”あの男”こと、涼邑 零。かつて西に居た頃は、数々の掟を破り、番犬所を困らせていた問題児だった……腕が立っていた分、扱いが厄介でもあった……

そんな男でも一夏にとっては頼りになる先輩であるが……

『それと、またIS学園周辺に近づこうとしているホラーが現れました』

神官は、一夏に指令書を手渡した。

休日、簪と本音は久しぶりにショッピングを楽しんでいた。

「ああ、この女の人の声、おりむーに似てるっ!」

「ねえ、本音。織斑一夏って、セイ・ーの声なの?」

立ち寄ったアニメショップで流されているアニメに出ているキャラクターの声が、”織斑一夏”と似ているようだ。

「うん、凄く似ているよ。男の子の声じゃないんだ」

男として、それはどうなの？と簪は思った。

「それにおりむーは、凄く優しいんだ。セシリアさんに酷いことを言われたのに、それを笑って許したんだよ」

「そうなの……」

簪は、本音が織斑一夏に夢中になっている事を感じた。それは憧れから来ることに……

「この前の授業で、ISで地面を蹴って跳んだんだ。そしたら、織斑先生に怒られたんだ」

常におりむーはと話す親友に対して、簪は織斑一夏に益々興味を抱いた。

男性のIS操縦者ではなく、一人の人間としてどのような人物で何を思っているのかを純粹に知りたいと思うのだった……

二人は、その後、本音の趣味である着ぐるみの専門店へ行ったり、簪の趣味である特撮ヒーロー関係のショップを巡ったりと楽しい時間を過ごしていった。

IS学園へ戻るべく、簪と本音は、モノレールを待っていた。

<線路で事故が発生しました。ただいま、運転を見合わせています>
駅の構内でアナウンスが響いてから、すでに三十分が経過した。直ぐに立て直しがされるであろうと考えていたが一向に改善される様子がない。

「かんちゃん、モノレール遅いね」

簪も本音と同じことを思いつつ、モノレールを待つ。

「おやおや、IS学園の方ですか？まもなく、列車がきますのでもう少しだけお待ちください」

二人の背後に人のよさそうな笑みを浮かべた駅長と思わしき男が立っていた。

「ええ、まだ掛かるんじゃない……」

本音が言い切る前に、列車が目の前に到着した。

「どうぞ、こちらへ……」

促す駅長に対して、本音と簪は何も疑わずにモノレールに乗り込ん

だ。

それと同時に、動き出した。だがこの時、二人は気が付かなかった。駅で待っているのは自分たち以外にも居て、その人達がこのモノレールに乗らなかったことに……

二人の姿は突然、消失したかのように駅から消え去ってしまった……

……

IS学園

IS学園の屋上で千冬と箒の二人が対峙していた。箒から千冬に話したいことがあつて此処に、来てもらったのだ。

「織斑先生、いえ、千冬さん。この六年の間に一夏に何があつたんですか？」

不安な表情を浮かべ、千冬に尋ねる箒。対する千冬も一夏の事を思いっ少しだけ辛そうな表情を見せた。

「ああ、お前も薄々違和感に気づいていたんだな。確かに今の一夏は、お前の知っている記憶とは違う」

「それは一体なんですかっ！？！私にできることがあればっ！！！？」

今の一夏の事を少しでも知りたいといわんばかりに声を上げるが…

……

「悪いが、お前にできることは何も無い。私や束ですら、”力”が及ばない場所に一夏は居るのだぞ」

「なっ！？！あなたですら及ばないとは、どういふことですかっ！？！？」

「篠乃之、私を買いかぶりすぎだ。私を上回る”力”など、吐いて捨てるほど存在する」

千冬の脳裏に一年前の光景が浮かぶ。

千冬

鎧を召還し、奇術師を思わせる異形との戦いの最中、私は一夏を助けようと戦いの中に割り込み

”姉さんっ!!?!?!”

ISの絶対防御をも貫通する攻撃に私は、成すすべも無く叩きつけられたのだ。

”一夏、一旦鎧を解除しろっ!!!!!!このままじゃ不味い!!!!!!”

不屈きモノが悲鳴のように叫んだ。一夏は、それを聞き入れることなく異形を睨みつけるように立っていた。

”うわああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!”

一夏の鎧が変化したのだ。大きく盛り上がり、巨大な獣を思わせる姿に……

”ウオオオオオオオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!”

夜に咆哮する獣が一夏とは思えなかった。鎧越しに見た一夏は……

あの時、何もできなかったことを千冬は今も嘆いていた。世界最強のブリュンヒルデの称号も何も役に立たなかった。ISも……

ホラーには何もかもが通用しない。ISですらも滅ぼすことが叶わない。例え第六世代を越えても……

「……千冬さん。どうしたんですか？」

拳を握り、震えている千冬に対して篝は戸惑っていた。

「いや、なんでもない。篠乃之、悪いことは言わない。一夏の事をお前が好いているのは知っている。だが、一夏に深く踏み込むな」

「……それは、何故ですか？私では、役不足とでもいいたいのですかっ！？」

「それを言うなら、私も役不足だ。一夏が関わっている闇は知ってはならないんだ」

その言葉に千冬は、噛み締めるように言う。ホラーと魔戒騎士の世界は、多少は裏の世界の事情を知る千冬ですら恐れるもつとも深い闇の世界なのだ。

おそらくは、他の者達も恐れ関わることを避けている。IS委員会を悩ませている”亡霊”ですらも……

「篠乃之、一夏の闇には踏み込むな。踏み込んだら、お前は今まで

通りにはいなくなるぞ。私や束のように……」

千冬のいつになく真剣な目に箒は何も言えなくなった……

「それと夜はなるべく出歩くなよ」

背を向け、千冬は屋上から去っていった。その背を箒はただ見る以外に何もできなかった。

千冬

我ながら、悪役に徹しきれないな。篠乃之には可愛そうだが、お前が闇の世界を知ってしまえば……

何もできない自分自身に苛立ち、間違いを犯してしまうかもしれない。い。

そうなってしまえば、一夏を再び危険な目にあわせてしまう。今夜もホラー狩りに行くだろう。

相手は、IS学園を目指しているわけではなく周辺をうろついてい

るらしい。まったく、どうしてIS学園に近づいてくるのだ。

腹立たしいが、私にできることは一夏を想う少女を闇の世界に近づけないようにするぐらいだ。それが一夏を想う心を否定してもだ……

一番は、一夏が魔戒騎士を辞め、ISにも関わらずに日常を生きて欲しいこと……

この学園に來ればと……淡い期待すら抱いていたが、それは裏切られてしまった……

もうすぐ夜が来る……ホラーと魔戒騎士達の時間が始まる……また、私の家族が手の届かないところに……

以前、私は一夏に”お前達、魔戒騎士はいつも親しいものを悲しませているのか”と問い詰めたことがあった。

一夏は”必ず戻る。だから信じてほしい”と言う。これは、あいつが目標とする黄金騎士の言葉であり、その黄金騎士にも愛する者がいる。

その者は、ただ一途に黄金騎士の無事を祈り、会えるときには会えると言っているらしい……

その頃、一夏はIS学園周辺の駅にホラーの気配を感じ鈴と共に来ていた。

「くそつ、二人ほど自分の結界の中に招き入れやがった」

「結界か……今、相手は何処に居る？」

「さあな、結界事態がややこしいからな。今日中に探せるか……」

ヴリルの言葉に一夏は、少しか口元を歪めた。

「一夏、ちょっと……」

鈴が一夏の袖を引っ張る。この場から移動したいようだ。

「鈴、何か分かったの？」

「ここじゃ、あの子が目立つからこっちに……」

鈴と共に一夏は、駅から少し離れた公園に来た。

「この子が、ホラーの気配を感じているわ」

鈴が連れている魔戒魚が身体を震わせて応える。

「でかしたぞっ！！！」

ヴリルの言葉に気を良くした魔戒魚は宙を撥ね、二人をホラーの居場所まで案内するのだった……

モノレールに乗り込んだはずであったが、何故か古びた列車の車両の中に二人は居たのだ……

「ねえ、かんちゃん。此处、何処なの？」

本音は、親友である簪に問いかけた。その表情はとても不安げである。

「わからないわ。何処かの誰かが私達を誘拐したのかしら？」

確証はないが思い当たることはある。自身の生まれである更識家は日本の暗部に所属している。故に他の暗部に関わる者から敵対されている。

このIS学園の裏の事情は姉が対応している。その姉に揺さぶりを掛けようと自分を”標的”にすることは、十分にあり得る話だ。

モノレールなのに、何処か昭和の雰囲気放つ奇妙な列車の中に迷い込んでしまった。

乗客は誰ひとりとしておらず、照明器具もまばらで薄暗く、吊皮が不自然に揺れている。なにより、窓の向こうの景色が見えないのだ。夜でも外の街灯は確認ができるのに、それが確認できないのは、はつきり言つて異常だ。誘拐にしても、あまりにおかしすぎる。

簪自身も不安ではあるが、親友と一緒にいる以上取り乱してはならないという考えから、彼女自身が驚くぐらい冷静でいられた。

「はははははは、お譲さん達、別に誘拐と言うわけではないですよ。あなた方が、今の自分よりも進みたいと言うことから、この一線を越えられたのだよ」

突然、年齢のいった男の声が社内に響いた。いつの間にか自分達の前に立っていた。

「……っ!!?!?!」

「……おじさん。誰なの？」

簪は、現れた人物に対して驚きながらも警戒の色を浮かべた。先ほどまで居なかつたのに、今まで居たかのような存在感を持つ人物に只ならぬモノを感じたからだ。

本音は、そんな簪の気持ちを察せず男に問いかけてしまった。

「先ほどお会いしたではありませんか、私は、先ほどの駅長であり、この列車の車掌だよ。お譲さん」

車掌は好意的な笑みを浮かべた。本音は、安堵の息をつくが、簪は彼女を庇うように前に立ち、

「だったら、この列車はどこへ向かっているんですか？他の人たちは何処に？」

少しばかり目を鋭くして、簪は車掌に問う。状況があまりにもおかしすぎるのだ、誰ひとりとしていない列車。突然現れた車掌など、考えれば考えるほどおかしい。

「ああ、他の者たちは私達が”食った”。皆、自ら”一線”を越えてしまったのだ、皆、日常には未練はなさそうだから、罪悪感を感じないがね」

「……………食べた……………食べたって、どうということなの？車掌さん」

本音は、気味の悪いことを言う車掌に恐怖すら感じていた。彼女も気づき始めたが、この状況は明らかにおかしすぎるのだ。

「ふざけないでっ！！！！真面目に答えないと私にも考えがあるわっ！！！！！！！！」

簪は自身の専用機である打鉄式を展開させる。ISをここで勝手に使うものなら、重大な問題ではあるが、この状況を打開するには、これしかない。簪は考えたのだ。

「……………ほう、ISか。となると君は、代表候補生かな？これは、そ

のまま食べるのは失礼だな」

先ほどの人のよさそうな笑みとは違う悪意を持った笑みに、簪は牽制と言わんばかりに近接用の武装であるナギナタを展開し、それを車掌に切りつけるのだが、

「おやおや、脅して私を制することができると思っのかね？悪いが、その甘い考えは捨てたほうが賢明だよ」

車掌は、恐れることなくISの武装を素手でつかんだのだ。只の間であるはずの彼はあろうことが力づくで武装を簪からもぎ取ったのだ。

「ええっ！？！！」

本音は、目の前で起こった光景に対して声をあげてしまった。それは簪も同じだった。ISの力は、人間はおるか既存の兵器を上回るもののなに、こんなことができる人間が存在するなどあり得ないからだ。

「”IS”の力では、私は、倒せないっ！！！！！」

車掌はそのまま、ナギナタを砕いたのだ。ただ砕いたのではなく、奇妙にゆがみ、まるで粘土細工のようにボロボロに腐ったのだ。

「そ、そんなっ！？！なんでっ！？！」

驚きの声を上げる簪は、すぐに冷静さを取り戻し

「本音っ！！！！早く逃げてっ！！！！！」

今、親友を護れるのは自分だけだと思い、簪は背中に搭載されている荷電粒子砲で再び牽制を図るが

「先ほども言ったが、牽制などと言う甘い考えはよした方がいい」
右手を正面に掲げると同時にすさまじい衝撃が簪を襲う。

「きゃあっ！！！！！」

絶対防御すらすり抜け、はるか後方まで吹き飛ばすほどの衝撃だった。簪は倒れ、ISも解除されてしまった。

「か、かんちゃんっ！！！！！」

急いで簪の元へ駆け寄ろうとする本音であるが、その行く手を阻むように車掌が彼女の肩を掴んだのだ。

「君には、まだ役目があるのだよ、お譲さん。君をまず最初に喰らい、あの娘に絶望を見せつけねばな」

車掌の力は凄まじく、一介の女子である本音では振りほどくことはできなかった。

「やつ、は、放してよっ！！！」

「本音を放してっ！！！！！！！」

本音と簪の言葉を見無視するように車掌は、口を開け、彼女を喰らおうとしたその時だった。

突然、車掌の正面に奇妙な文字を含んだ円が現れ、吹き飛ばしたのだ。本音はいきなりの事に啞然としてしまった。

何が起こったのかまったくわからなかったのだ。

「間一髪だったわね。こここの”結界”を探すのは苦労したわよ」

本音が振り返るとそこには、転校生の凰鈴音が大きな筆を携えて立っていた。背には大きな旅行カバンも……

「リンリン、どうして此处に？さっきのは、一体何？」

よくわからない事態に対して、本音が聞き出そうとするが……

「それは今、ここで言うべきことじゃない」

応えたのは、簪の隣に立っていた織斑一夏であった……

「やれやれ、とんだ邪魔が入ってくれたものだな。貴様、”魔戒騎士”か？」

制服に着いた汚れを払いながら車掌は、腰を上げて一夏に問う。

「ああ、そうだ。お前達を”狩る”ものだ」

「一夏、気をつける。こいつの名は、スチーム。性格の悪さで有名なホラーだ。少し厄介だぞ」

ヴリルが目の前にいるホラー スチームに対して解説する。

「性格が悪い？心外だな。私は日常に不満を持ち、一線を越えたいものだけを喰らう。他のホラーと違い、健全だとは思うのだが……」

「何を言う。お前のはつきりしない言い方では、そうは聞こえない」

一夏がスチームの言葉を否定する。否定されたスチームは、少しだけ頬を歪ませ

「くくく、随分な良いようだな。まあいい、食事の前に少しだけ運動をするのも悪くはない」

「その食事にありつくことは永遠にない」

魔戒弓を構えて、一夏はホラー スチームと対峙する。

「布仏さんとそっちの子。早くこの場から退散するわよ。一夏の邪魔にならないように……」

鈴は、二人にこの場から共に離れる事を促す。

「え、でもおりむーが」

一人、あの恐ろしい存在に一夏が戦うことに本音は不安を覚えていた。ISですら倒してしまう恐ろしい相手なのだ。

特に簪は、相手の恐ろしさを間近で接したために不安は本音の比ではなかった。

「大丈夫よ、一夏は必ず戻ってくるわ。絶対に勝つから」

「そんな根拠はどこにあるの？」

「根拠ね……それは、アタシが一夏の”強さ”を信じているからよ。魔戒騎士、ううん”護りし者”としての一夏を……」

鈴の目は、何よりも真剣であつた。純粹に一夏を信じているのだ勝利すること……

彼女の真剣さに充てられた二人は、促されるようにこの車両から離れるのだった。

車両から飛び出した鈴の前に、自身の相棒である魔戒魚が現れた。

「ありがとう。出口までお願いね」

宙を舞う魚に対して、簪と本音は驚いたが、そんな状況ではないと察し鈴の護衛と案内の下、結界の外へと抜けたのだった……

「あの小娘達が無事で帰れると思っているのかね？ 思っているのなら……甘い」

スチームの言葉に一夏は

「私は、鈴を信じている。彼女は、私と共に戦う”魔戒法師”だから」

「くくく、ならばお前を倒し、絶望させてやろう！……！！」

スチームは、一気に距離を詰めるべく駆けだし蒸気を纏った拳を一夏に叩きつける。

魔戒弓でこれを一夏は防御する。拳に籠っている蒸気の暑さが僅かだが伝わってくる。

「気をつけろ一夏。こいつに掴まれたらやばいっ……！！」

ヴリルがスチームの戦力を分析し、一夏に伝える。確かに掴まれたら火傷だけでは済まされないだろう。

その間にもスチームと一夏の攻防は続く。長身の身体を生かしたスチームの蹴りと拳は一夏の急所目がけて放たれるが、一夏はこれを魔戒弓でいなし、切りつける。

振われた刃をスチームは、蒸気を纏った手刀で受け止めてカウンターの浴びせる。

「くっ!?!」

カウンターが一夏の頬を僅かに掠め、蒸気の熱のため頬が少しだけ赤くなる。火傷をしたためである。

「ハハハハ、少しは男らしくなったのではないか？」

スチームが一夏に対して余裕の言葉を吐く。対する一夏は、いつものように……

「私は、どちらでもない。だから、この顔に傷を付けられてもどうとは思わない」

内心、姉か鈴に知られたら怒られるだろうと思いながら、一夏は反撃のために距離を取り、矢を放った。

「おいおい、一夏。女が顔を傷つけられて、その台詞はないぞ」

「うるさいぞ、私はどちらでもない。だから別にどうということとは

ない」

場違いな台詞を言うヴリルに怒りながらも一夏は、スチームに対し立て続けに矢を放つ。

スチームは矢を徒手空拳で弾くが、時間差を置き虚を突くように放たれる矢にはさすがに反応しきれなかったのか、身体に受けるてしまった。

放たれた矢は、肩と左膝に突き刺さる。それを確認したうえで一夏は距離を詰め、刃で切りつける。

これを再び迎え撃とうとするモノの肩をやられ、うまく動かすことができずに反応が遅れてしまい、スチームは正面から鋭い斬撃を受けてしまった。

さらに追い打ちを掛けられるように一夏から強烈な拳が顔面に胸部に蹴りが加えられて、スチームは後方に倒れてしまった。

被っていた帽子も飛ばされ、一夏の足もとに落ちていた。

「はははははっ！！！！随分とやってくれてはいないかっ！！！！さすがは、あの織斑千冬の弟、いや、妹か？」

「私の事を知っているのか？」

スチームは、痛む傷にうめきながらも言葉を続ける。

「ああ、あの女には本当に感謝している。お前と言う”存在”のために、この世界を我々が住みやすい場所に変えてくれたことを…そ

うそう、篠乃之博士にも感謝だな」

立ち上がったスチームはさらに

「それにしても皮肉なモノだ。お前のために世の中を変えた姉の成果をお前が否定するとは……」

「ああ、確かに姉さんは越えてはならない一線を越えてしまった。だけど、まだやり直せる」

一夏は、千冬が自身に言う”まだやり直せる”と言った言葉をそのまま自身が口にしたことに驚きながら……

「たとえ世界が醜く姿を変えたとしても、そこに愛する者、護りたい者が居るのならば、私たちは前に進める。どんなに辛くとも乗り越えられる」

一度変わってしまった世界は、二度と元には戻らない。だけど、それを悪い方向ではなく良い方向に持つていくことも可能はずだ。

闇に包まれてもそれを切り裂く希望がある限りは……

「そうか……ならばそれを乗り越えてみるのだなっ！……！！」

スチームは身体から蒸気を大量に吹き出したと同時に頭上へ勢いよく飛びあがった。車両の屋根を突き抜けた。

それを追うように一夏もスチームが開けた穴へ飛びあがった。

飛び上がったと同時に、強烈な熱を持つ鉄の塊が向かってきたのだ。

それを魔戒弓でいなし、屋根に立ち、視線を前方に向けた。

そこにはホラーとしての姿に変化したスチームの姿があった。特長的な三角系の頭、目深に帽子をかぶった駅長と出っぷりとしたお腹と脚が特徴的で至る所から、配管が出ている。

生き物と言うよりもロボットと言った方が近い外見である。

スチームの手は、五指が異様なまでに長く太い。指と言うよりも五つの大砲としかいえない。蒸気が身体の配管から吹き出すと同時に五つの大砲から攻撃を仕掛けてきた。

それらの攻撃を避けるのは困難であうと判断したのか一夏は、鎧の召喚を行う。いつものように頭上に掲げるのではなく正面に円を描き、そこへ駆けだすと同時に鎧が装着された。

緑の目を持った蒼い狼を模した騎士が、大きく変化した魔戒弓をスチームの攻撃にひるむことなく突き進み、肘ごと切り伏せた。

腕を失ったスチームは、バランスを崩しよろめくが、反対の腕で蒸気の力を上乘せした拳を一夏に叩きつけるものの、そのまま掴まれ逆にねじ伏せられてしまった。

「はああああああっ！！！！！！」

一夏は渾身の力を込めた蹴りをスチームの大きく出た腹に加え、車両の屋根から落としたのだった。

屋根から落ちたスチームは、態勢を整えようとするのだが、迫ってきた一夏に大きく振りかぶった魔戒弓による斬撃により真っ二つに

切り裂かれスチームはそのまま弾けるように消滅してしまった。

消滅したスチームに合わせるように結界が消え、どこか分からない古びた駅の構内に一夏は佇んでいた……

「なあ、一夏。本当はお前、顔を傷つけられて怒ってたんじゃないのか？」

ヴリルが改めて一夏に聞くが、一夏は無言のまま頬につけられた傷を抑えてこの場を後にするのだった……

その後、学園で鈴と合流し頬の傷を指摘されたのはいうまでもなかった。

翌日の昼休み、IS学園の中庭で一夏と鈴、本音と簪の二人が居た。

二人から一夏と鈴を誘い、この場に来ているのだ。

「ねえ、おりむー、昨日のアレは何だったの？」

「……………」

本音と簪は、昨夜の事を一夏に尋ねた。

「アレは、魔獣 ホラー。遙か古の時代より闇の潜んでいた魔獣。奴らは、人間の魂と肉体を食らうためにこの世界に現れる」

「昔から…ISができる前から居たの？」

簪の言葉に一夏はうなづく。

「そうよ、中国四千年の歴史よりも前から居たわよ」

鈴が応える。

「それ以上のことを知る必要はありませんわ」

そこへ本音が大人びた容姿の女生徒が現れた。一夏達を睨むように立つ。

「お、お姉ちゃん。」

「虚さん」

虚と呼ばれた女生徒は、本音と簪の二人に

「あなた達は、下がりなさい。これ以上”魔戒騎士”には関わってはなりません」

「それって、どういう……」

「質問は許しません、本音。あなたは知らないでいいの。昨日のこととは悪い夢だと思いなさい」

虚は睨みを聞かせながら、一夏と鈴を見る。

「昨晚、妹と簪お嬢様を助けて頂いたことには感謝します。ですが、これ以上ここの生徒たちとは、関わらないでください」

言われなくても一夏と鈴は分かっていた。本来、自分たちはこちら側の人間ではないのだ。

自分たちが関わることで、闇の世界の存在を知ってしまう。

「分かっているよ。私たちがここでは、異物でしかないことは……」

一夏の言葉に鈴も同意するように頷いた。

「そうですか、本当ならあなた方の入学は反対だったのですが……関わらないようにと言っておくぐらいしか『虚。そういう訳にはいかないじゃない』」

虚の言葉を遮るように第三者の声が響いた。

「会長……」

現れたのは、簪が大人びたような外見の女生徒だった。

「あなたは……」

「私の名は、更識楯無。ここの生徒会長よ、織斑 一夏さん。いえ、織斑 一夏君と言った方がいいわね」

楯無は、一夏に対して何かを含むように言う。これに対し、一夏は

少し睨みを利かせるが

「うふふふ、そう睨まないで。あなた、とっても可愛いんだから」

「男がそう言われても嬉しくはないよ、更識 楯無 生徒会長」

「更識？てことは、お前が番犬所が言ってた協力者か？」

ヴリルが会話に入ってくる。まさか、ここで更識の名を聞くとは思わなかったからだ。

「ええ、そうよ。もしかして、魔導具って奴？話には聞いていたけど、本当に喋るのね」

一夏は、胸からヴリルを取りだした。アクセサリーが喋るのを見て、鈴以外の面々が驚いていた。

「しゃ、しゃべった……」

「んなことは、どうでもいい。更識 楯無 生徒会長。まさか、おっぴらにその名前を名乗ってるんじゃないだろうな？」

少し気になったのか、ヴリルが楯無に聞いてみた。

「ええ、そうよ。私の名前は更識楯無って、さっきから言ってるじゃない」

その言葉に一夏は……

「ヴリル、更識楯無は隠し名だったよね」

「……ああ、そのはずだったんだが……世の中、随分と変わった物なのかね」

すつとぼけたように返すヴリルに一夏、鈴は呆れた視線を向けるのだった。

「ふふふ、その辺りはいいわ。お姉さん。あなたがちょっと気になつてるのよ、織斑君」

楯無は、扇子を手にとって笑みを浮かべる。その笑みは、虚がよく知る楯無の悪癖ともいえるものだった。

「お嬢様。この場では、お控えください。魔戒騎士に面白半分に関わっては……」

「番犬所からの要請は受けるわ。だけど協力者として、あなたの実力が見たいわ。だから、あなたにISで勝負を申し込むわ。織斑君」

「お嬢様っ！……！」

虚の言葉を見無視するように飄々と一夏と話を進める楯無に苛立ちを覚えた。だが、虚は何も言えなかった。

番犬所からの要請は、断ることができない。

更識家は、日本の暗部に関わる影の一族である為に闇の世界には少なからずの関わりがある。

魔戒騎士を擁する”番犬所”とは、それなりにつながっているのだ。

過去に前当主が黄金騎士とも交わったことがあるが、それはISができる前の事である。

「断つてはだめよ。男の子が売られた喧嘩を買わないのはどうかと思うわよ。女の子でも挑戦は受けるわ」

やはり一夏に対して含む言い方である。一夏は……

「分かった、そうまで言われたら受けないわけにはいかない。受けよう、その挑戦」

「良いわよ、それでこそ”男”だわ。勝負の日取りは後で連絡するから、それまで楽しみにしていてね」

軽く手を振って、楯無は虚を伴って去って行った……

その様子に一夏、鈴は、

「一夏……アタシ達、平和な学園生活を送れそうにないわね」

「ああ、そもそも私が此处に居る時点で、そんな物はなかったのかもしれない……」

二人の会話に、簪と本音は何も言うことができなかった。

分かってしまったのだ。自分たちが知らない世界があり、その世界で自分たちの力があまりに無力であることを……

それから間もなくして、一週間後に第一アリーナでの試合が伝えら

れた
.....

第捌話「踏み切り」（後書き）

色々と長くなっしまいました、やりたいことはやりつくしました（汗）

最初に言っておきますが、私はけっして千冬のアンチではありません。むしろ千冬は好きなキャラですね。

この世界での白騎士事件は、千冬が東に計画を持ちかけ、東が”おもしろそー”ということでした承したという流れです。

最初は、何処かの戦場に介入してISの力を見せ付ける予定でしたが、東が悪乗りして、日本にミサイルを二千発放っちゃったんです。

原作では、千冬は何を考えて東と協力したのかがよく分からなかった、もしかしたら、千冬自身世間に対して、不満を持っていたそれを、自分の力で壊したかったのかと思います。

踏み越えてはならない一線を越えてしまったのは確かですね。はい

……

セシリアの絡みが少ない。セシリアは、IS関係で出張りますので、次回ではそれなりに活躍します。あの子の訓練の模様とか……

ヒロインのポジションとしましては、箒は日常、セシリアはIS関連、鈴はホラー関連での役割です。

箒と本音は、箒と同じく日常ですが、IS関連の暗部について関わってきます。

今回の話を書いてみると、簪よりも本音の方が活躍しているような……

簪は、自分からはほとんど喋らない印象がありますので、こうなったのでしょうか？

それを言うなら、ここの一夏も自分からはあまり喋らないほうなんですが……

しつこいかもしれませんが、こちらの一夏のイメージC.Vは、川澄綾子さんです。

次回より、一夏の魔戒騎士としての名前が明らかになります。

V S 更識楯無。 I S 国家代表 V S 魔戒騎士

ぶつかり合う誇りと誇り。

学園最強を称する国家代表の”強さ”は半端じゃない。

次回！「更識 楯無」

霧を晴らす騎士の刃が導く蒼天をその目に焼き付けろ！！！！！！

第九話「更識楯無」(前書き)

更新が遅れてしまいまして、申し訳ありません!!!

先週と今週のGAROは、本当に良いものでした。

先週の仮面の男との戦いは、落下しながら戦うという本当に良いものでした。

落下しながらの戦闘は、やっぱりかっこいいです!!!

今週は東北新社創立50周年記念作品だけにOPからびっくりさせられました。

時代劇を絡めていましたので、気合の入りまくりのOP。ホラーは残念でしたが、あの侍は、凄くかっこ良かったです。

ただ、対決がいつものGAROアクションだったので、このあたりは差別化して頂いたほうが、魔戒騎士対侍の異種剣術試合がみれたかなと思ったり……

これまでの二話はバトルの回が盛りだくさんで良かったです。

今回は色々と盛り込みすぎて、難産でしたがよろしくお願いします。

どうぞ!!!!!!!

第九話「更識楯無」

「今日から、お前の名は”楯無”」

「ええ、私は・・・だよ。そんな名前じゃないよ!!!」

「いや、これから更識の当主を貴女は受け継ぎます。故にこれからは、そう名乗ってください」

その日、少女は”自分の本当の名前”を失い、”更識楯無”となった。

それからの日々は、家に居る誰もが彼女の事を”更識楯無”と呼ぶ。一つ離れた妹ですら、彼女の名を呼ぶことがない。

少女は、自分の”名”を取り戻したいと願った。友人達も自身の”本当の名前”を知らない。

裏の一族である更識家の代々の当主は更識楯無と名乗る。これは、裏の世界で生きていくための名である。

幸いにも彼女は、様々な面で”才能”に恵まれていた。

文武両道、さらにはISの操縦から設計まで、寄せられる期待以上の成果を上げた。今の彼女は、更識家の当主、IS学園の生徒会長、ロシアの国家代表として振舞っている。

更識家のモノは、裏の世界には関わっても、より深い”闇の世界”には手を出すなどいつていた。

”魔戒騎士に勝つのは、至難の業である”

”代々の当主の挑戦に全て勝利をした”

もし、魔戒騎士に自分が勝てるのならば、更識楯無ではなく、”本の自分の自身”を見てくれるのではないかと……

彼女は、年相応の少女であることを心から願っていた……

IS学園 生徒会室

「お嬢様、悪い癖が出ていますっ……！言っておきますが、魔戒騎士に面白半分で近づくのは止めてくださいっ……！！」

「虚。あなたも言っわね…カルシウム取ってるの？」

「ふざけないでくださいっ……！！私でなくとも忠告ぐらいは進言

させていただきます。これは、あの”番犬所”からの要請です」

「そう…でも、私と一夏君とどっちが強いと思う？」

「話を聞いていましたか？そうですね、ISの操縦を見る限り国家代表候補生では、相手にするには”覚悟”と”経験”が違いすぎます。国家代表でも難しいところでしょう。言うまでも無く、ホラーという魔獣は、私達の人智を遥かに超えています」

虚の言葉に楯無は、今一ピンとこないのか扇子を顎にあて、

「ホラーね。そんなに厄介なものかしら？」

「そうです、あれはISですら滅ぼすことが叶わない存在。ですから、面白半分に魔戒騎士の仕事、行動には干渉しないでください」

「でもね〜、そんな事、言われてもピンとこないわ。まるで想像の産物じゃないの」

「……………実際にアレを目にすれば、お考えも変わると思いますが、遭遇することは、”死”を意味しますから、お辞めになったほうがよろしいかと……………」

「虚、あなたは、見たことがあるの？ホラーを」

「……………はい。幸運にも”魔戒騎士”に助けいただきました…」

虚は、忌々しそうに頬を歪めた。まるでそれは、理不尽な事に耐えているように見える。

「助けてもらったのなら、どうして一夏君達にきつく当たるの？」

「そうですね。私の親友をホラーごと殺したのですから……感謝などできようがありません」

虚の脳裏に忌々しい記憶が浮かぶ。ホラーに憑依された親友を死神を思わせる鎌で両断した赤い騎士の姿を……

” どうして、殺したのっ！！助けられたかもしれないのにつ！！！！”

普段の冷静さをかなぐり捨てて、鎧を解除した狐目の男に虚は詰め寄る。

” 無理だよ。ホラーに憑依されていた時からその子の魂は死んでいたんだ”

男が付けている目玉を模したイヤリングが少年のような声で、虚に語る。

” そんなのっ！！！！あなた達の勝手な理屈じゃないですかっ！！！！”

” 勝手な理屈を言っているのは、お前だ。悪いが俺達”魔戒騎士”はホラーを狩るのが使命だ。悪い夢を見たと思って諦める”

狐目の男こと”五道 アキラ”はそのまま背を向けて虚から去っていった。

「そんなことがあったの？あなた……」

楯無は、悲しそうな目で虚を見る。

「はい。だから、私は魔戒騎士、法師がこの学園にホラーを招く可能性が怖いんです。その時に、もし……本音が……」

大切な者が”闇の世界”に巻き込まれて、命を落としてしまうのではないかという不安に駆られるのだ。

「……護りし者と言うわりには、やっていることは恨みを買っているのね」

楯無は、飄々とした笑みを押さえ真剣な眼で”番犬所からの要請”を考えるのだった。

更識家は、日本の暗部に関わってきた影の一族であるが、闇の底にある”番犬所”には繋がりこそは持つても、できる限り関わるなと言われている。

だからこそ、知りたいのだ。家の者達が、代々の当主が恐れていた闇の世界を……

好奇心が強いのは良く分かっている。魔戒騎士がどれほどのものなのかを確かめたい。歴代の当主は口を揃えて、魔戒騎士に勝つのは至難の業であると言う……

特に魔戒騎士の最高位である”ガロ”には、絶対に勝てないと……

「……それに一夏君って、ちょっとずるいわよね。女にしか扱えない”IS”と男しか扱えない”ソウルメタル”の両方が使えるなんて……」

一夏が男女両方の性質を持っているからこそ、使えるのだが……

楯無は一夏が二つの強大な力を使えることに少しだけ嫉妬の念を覚えた。何よりも……

（あなたは、自分が関わっている世界が怖くないの？”自分”を失くしてしまうかもしれないのに……）

一年一組 教室

「一夏さん、聞きましたわっ！！ロシアの国家代表と試合をされますとっ！！」

セシリアは早朝、一夏の元へ詰め寄った。他の生徒達も騒ぎ出していた。

「何だっ！一夏、どういことだっ！！！」

箒もまた騒ぎ出す。一夏は落ち着いた様子で

「ああ、ここの生徒会長の更識楯無さんから挑戦を受けた」

一夏の言葉にさらに周りが騒ぎ出した。

「うそっ！！！！あの学園最強の会長がつ！！！！！！」

「でも、凄く盛り上がりそうだね！！！！早く、皆に教えてあげようよっ！！！！」

IS学園の生徒会長になるには、一つの資格が存在する。それは”学園最強”でなければならないと言う事。

彼女は学園で唯一の国家代表であり、自由国籍を有してロシアの代表であるという。

「一夏さん、代表候補生と国家代表ではあまりにも差が付きすぎていますわ。挑戦をお受けしてよかったのですか？」

セシリアは、イギリスでの訓練時代に現在の国家代表と模擬戦を行ったことがあるのだが、その実力の差はあまりにもかけ離れていた。大人と子供以上の差が存在しているのだ。更識楯無は、この学園では他の誰よりも遥かな高みに居る。

「確かに今思えば、受けたのは軽率だったかもしれないが……向こうは、私の気持ちを無視してでもそう仕向ける気だったのだろう」

「それは、どういう……」会長っ！！！！！！」

セシリアの言葉を遮る様に教室の入り口から声が聞こえてきた。

教室の入り口には、生徒会長の更識楯無と会計の布仏虚が立っている。

た。虚は一夏に対して、厳しい目を向けている。

「ごきげんよう、織斑一夏君、一年一組の皆さん。今日もいい天気ね」

楯無は”本日快晴”と書かれた扇子を広げて教室の前の教卓に進む。

「今日は、訳があつて此处にお邪魔させた貰ったわ。一週間後の第一アリーナで私と織斑一夏君の試合をするから、よろしくね」

笑顔で宣言する楯無に対して、セシリアは一夏の言葉の意味を理解した。同じく鈴も

(……こいつ、あの場で断つても、絶対に断れないようにするつもりだったのね。更識って、どういう家なの？今度、烈花さんに聞いてみよう)

更識が影の一族であることは鈴も知識としては知っていたが、どういう一族かまでは知らなかった。今度の休みに師匠に聞いてみようと思うのだった。

「ちょっと、生徒会長、お待ちになつてください。貴方は、一夏さんの気持ちを無視して、一夏さんを見世物にしようというのですか」
セシリアは、楯無に対して厳しい目を向ける。

「あら、貴女も”賤ける”とか言つて、織斑君と試合をしたそうじゃないの」

楯無は扇子を顎にやって、飄々とした態度で言う。

「ええ、確かにワタクシは、自身の”驕り”で一夏さんに決闘を申しました。ですが、一夏さんは己のためだけに……いえ、自分の”力”を証明するためだけに戦うような方ではありませんわ!!!」

セシリアの言葉に一瞬だけ楯無の表情が曇った。虚ですら気がつかなかったが、一夏と鈴は気がついた。

「ふふふふ、面白いことを言うのね。貴女……」

「ワタクシは、事実を申しただけです、生徒会長。仮に断つても、そうせざる得ない状況に追い込もうとするのは許せません」

毅然とした態度でセシリアは楯無に言葉を返す。そして……

「一夏さんの手を煩わせる訳には行きませんわ。ですから、このセシリア・オルコットがお相手を致しますわ!!!!!!」

誰も予想が付かないこの展開に誰もが驚く。

「セシリア。これは、私が受けた”挑戦”だ。だから、私が受ける」

「一夏さん!!!!貴方が手を煩わせることなんて!!!!!!」

「煩わせるもない。私は、彼女の”陰我”をここで見過ごせるわけには行かないからだ」

再び、”陰我”と言う聞きなれない言葉を一夏は呟く。

「”陰我”?何かしら、その意味は?」

「この世界の森羅万象に宿る”闇”の部分。人間の邪な欲望、愚かな願い……いや、誰もが持っている”心の陰”だ」

一夏の言葉に楯無は思い当たる節があるのか僅かだが口元を歪めた。

「私は”師”より、それを断てと教えられた。だから、この挑戦を断る事はできなくなった」

「かなりの自信ね。少し、自信が過剰じゃないかしら？私のように、よく分からない人間の世話を焼くなんて……」

「自信過剰なんてものじゃないわよ。一夏が戦うのは、”守りし者”としてなの……たとえば、相手が見ず知らずの他人でも守れる者なら守るわ」

鈴が一夏の隣に立つように続く。二人の言葉に楯無の隣に立つ虚はさらに目を険しくする。

「そうなの？じゃあ一週間後の試合、楽しみにしているわ」

楯無は、虚を連れて教室を後にするのだった……

「守りし者？いえ、あなたたちは、ただの”殺し屋”じゃないの」

虚は、憎憎しげに呟いた……

脳裏に浮かぶのは、死神を思わせる鎌を持った紅い魔戒騎士の姿……

……

本音

おりむー。お嬢様と試合をするんだ。でも、何故戦うの？

よく分からない会話。昨日見たあの怖いおじさん。怖い目をしておりむーに当たるお姉ちゃん。

”陰我”って…心の陰って、あの完璧なお嬢様にもそれがあるの？

それを断ち切る。前のせっしーの時もそう言ってた。だから、今のせっしーは……

だったら、かんちゃんも、せっしーみたいに……

一夏が前に言っていた”陰我”という言葉。あれは、そういう意味だったのか。

確かに私にも”心の陰”というモノが存在する。だけど、それは武道の鍛錬で克服することではないか？

国家代表と戦う理由が相手の”陰我”を断ち切るため。凰が言う”守りし者”……

一夏の師とは、どういう人物だったのか？かつて、存在していた武芸者にも見える一夏だが……

やはり、私が知っている”一夏”とは違うのか？抱えている闇とは何なんだ？

すぐ傍に居る幼馴染と私は、住む世界が違っても言うのか？

いや、私と一夏の立っている場所が違っただけだ。私が一夏を支えられるぐらいに強くなればいいだけだ。

だから、一夏。お前の抱えている”闇”を暴かせてもらっぞ！！！！

放課後、一夏は自室に戻っており、そこで千冬と向き合うように話をしていた。

「……なるほど、更識がか……あいつめ、余計な事をしてくれる」

千冬は、額に人差し指を付いて溜息を吐いた。この学園で唯一の国家代表の更識楯無とは面識があるのだが、あの厄介な性格だけは何とかならないだろうかと思っていた。

「はい。私に勝負を挑んできたのなら、それ相応に対応はします」

一夏は、楯無との戦いは”協力者”として技量を確かめたいという考えではなく、彼女の好奇心から来ているものと察していた。

「お前なら例え相手が国家代表であっても負けることはないだろうが。気をつけろ、あいつは”裏の事情”に通じている。油断はするなよ」

姉として千冬は一夏に注意を促した。この弟は千冬としては認めたくはないが、あのホラーと戦うために戦闘の技量と冷静さは、ずば抜けている。

予想の斜めに行くホラーを相手にする故に戦闘での油断はまず、ありえない。

「……IS側では私にあまり小言は言わないんだね。姉さんは……」

「一夏、口に気をつけろ。まったく……お前は一応ここの生徒だからな。ISでのやり取りは許容している」

「そう言ってるけど、姐さんは一夏がISに関わる事は許さなかっただろ？何だか、いまさらって感じがするんだが……」

ヴリルが千冬の発言に異を唱えた。

「不届きモノか……いや、今は不埒モノだな。一夏の胸に居座るとは……」

千冬は、一夏の胸の位置に居るヴリルに対し青筋を浮かべた。

「なんだ？その不埒モノっていうのは」

「当然だ。一夏の胸に納まろうとする”煩惱魔導具”など、その呼び名で十分だ」

「……姉さん。私の何処を見ているの？」

一夏は、千冬の視線から自身の胸を両手で隠した。その光景に千冬は

「ま、待て。一夏、私が見ているのは、その不埒モノだ。決して、お前の胸を見ているわけではないっ！……！」

「そうだぞ、姐さん。だいたい、一夏の”もの”は俺を挟むほど大きくはない」

ヴリルの言葉に一夏の目から感情が消えた。

「……ヴリル。別に私は気にしてはいないけど、お前に言われると少し腹が立つのは何故だ？」

一夏は感情のない目でヴリルを手に取り、いつの間にか持っていた
”魔導筆”でその口元をなぞる。

「おいっ！！一夏っ！！！！俺が悪かったっ！！！！許してくれっ！！！！」

ヴリルの声は無常にも聞き入れられなかった。紅く光ったと同時に
ヴリルの口は閉ざされてしまった。

口を閉ざされたヴリルは、そのまま箱の中に入れられてしまう。

「一夏、アレをこのまま何処かにやれないか？」

「……だめだよ姉さん。私はヴリルの相棒だから少し反省してもら
うのも相棒としての勤めだから……」

”クスクス”と笑っているが、少し怖いのは千冬の気のせいだと思
いたい。

（……………一夏。お前は、どっぷり闇に浸かっているのだな）

昔は、あんなに可愛かったのにと過去を懐かしむ千冬であった。

「それと姉さん。更識楯無だけど……あの先輩は、何故”本当の名
”を名乗っていないの？」

「なにっ？どついうことだ。”更識楯無”は、あいつの本名ではな
いのか？」

「前に番犬所から、こっちで活動する協力者が”更識”だつて聞いたんだ。”更識楯無”は、裏の名で表で名乗る名じゃないんだつて……」

一夏の言葉に、また厄介なことになったと千冬は思った。

「まったく、お前は どうして私の目の届かないところで、厄介ことばかりに巻き込まれるのだ。あと、あの”軽い男”にも時々会っているようだな」

千冬の脳裏に何故か一夏と一緒に自宅に居た”軽い男”こと、涼邑零の姿があつた。

”お邪魔してます。一夏のお姉さん”

その横でお茶の用意をしている一夏。この光景にムカついたのは、何故だろうか？千冬には黙っていたが、腕輪だったヴリルを首飾りに変更したのは零である。

「不届きモノを不埒モノに変えたのは、どうせあの男の仕業だろう。あの男は、何故、私の家に我が物顔で居座るのだ！！！！図々しいにも程があるわっ！！！！」

当たっているのは凄いと一夏は、思った。それから三時間後にヴリルは開放されるのだった。

「一夏の”女の部分”は、怒らせるとめっちゃくちゃ怖いんだよな」

それから二日後、一夏は第三アリーナで蒼牙を展開していた。

「おい、一夏。お前はISをここまで動かせるんなら、後は”騎士”としての鍛錬を積んだほうがいいんじゃないのか？」

「束さんも言っていたけど、ISのコアには独自の意思があり、使用者に合わせて最適化し、進化をしていく。だから、少しでも動かさないと……」

ヴリルの問いに一夏は、ISの訓練の必要性を説く。IS学園に居る以上は、これを行わなければならない。

「なるほどな……更識楯無は国家代表だったな。確かに今は、ISを動かせるだけ動かした方がいいか……しかし、本当に対したもんだな。まさか意思の在るモノを生み出せるようになるとは……」

感慨深げにヴリルに呟いた。

「だが、話ができないのは残念だ」

「魔導具とISの会話か。どんな話をするつもりだ？ヴリル」

「ISは、男か女のどっちなんだ？女しか乗れないから、女なのか？」

ヴリルの疑問は一夏にも分からなかった。なぜ、ISが女にしか動かせないのかは、開発者である篠乃之 束にも良く分かっていないからだ。

ちなみに魔導具達の意味は、男のものもあれば女のものもある。

一夏は、もしかしたら自分と同じ中性かとも思ったが確かな答えではないので胸のうちにそっと留めた。

ここで誰かがコアのネットワークに呼びかけてきた。ISのコアは、相互通信ネットワークが内蔵されている。

これは広大な宇宙空間でのお互いの位置を確認することと連絡を取り合うためのものである。プライベートとオープンが存在する。

「誰かな？」

<織斑君。今、少しだけ話してもいいかな？>

呼びかけてきたのは、更識楯無の妹、更識簪であった。

一夏は簪と本音の二人でアリーナの客席に座っていた。

二人は、一夏のスタイルを見て溜息を付いてしまった。女である自分達以上のプロポーションに自信を失ってしまう。

「ねえ、おりむー。どうして、そんなにスタイルが良いの？男の子なのに……」

「……お姉ちゃんよりも凄いかも」

本音は羨ましがり、簪は自身の姉に勝っている一夏のスタイルとこれで胸が大きければ、”無双”ではないかと思うのだった。

「……あまり見ないでほしい。見られるのは、恥ずかしいから……」

一夏は予め用意しておいたジャージを羽織る。その様子に二人は、本当に一夏は”男”なのかと疑問符を浮かべてしまう。

本来なら女子が恥らうべきだが最近はその登場のため恥らう女子が少なくなっており肌の露出する機会が多い。

「まさか、私にそんな事を言いにきたのか？」

「違うよ。前のこともだけど……かんちゃんのお姉さんがおりむーの協力者ってどういう事なの？」

本音の言葉に続くように簪が視線を一夏に向ける。簪も更識家が普通の一族ではないことを知っている。だが、具体的にどういう事を行っているかまでは把握していなかった。

一夏は、どう答ええるべきかと悩んでしまった。理由は言うまでもなく、“闇の世界”に彼女達を巻き込んでしまうことに戸惑ってしまっただ。

一夏の悩みを吹っ飛ばす言葉が響いた。

「なぐに、一夏の”魔戒騎士”としての活動の協力者だ。それが、お前の姉さんってことだ」

ヴリルがISスーツ越しに喋ったのだ。その声に本音と簪は驚いたように辺りをうかがう。

「ヴリル……私がいいと判断するまでは、喋るなと言ったのに……」

「生真面目な奴だな。硬いこと言うな、あの姉ちゃんの身内だ。関係の無い話じゃない。それに……」

ヴリルは、少し言葉を切り……

「姉弟同士の隠し事は、もう懲りてるだろ？一夏」

一夏

言われてみればそうだった。かつて姉さんは私をISに関わらせた

くないのか、どういう仕事をしているのか教えてくれなかった。

今思えば、ISに関わる影の部分に私を関わらせなくなかったのだらう。

そういう私も”魔戒騎士”であることを隠していた。姉さんがどんな思いで私を守ろうとしていたかを知ろうとししないで…………

私を愛するあまりに世界そのものを変え、守ろうとしてくれたことを…………

私が”魔戒騎士”であることを知ったとき、姉さんは酷く取り乱し、自分の及ばない世界を知ってしまった。

色々あったけど、私と姉さんは今も家族で居る。少しばかりのすれ違いはあるけれど、前よりも”家族”でいる。

察すれば布仏さんと更識さんの姉さん達は、闇の世界に関わろうとしている。そんな世界に関わるのならば、二人も無関係ではいられないだらう。

ヴリルの言うように、私は話さなければならぬのだらう。それから、どう選ぶかは…………二人次第だ。

信じられない話だった。数日前に私たちを襲ったのは、魔界から現れる怪物”ホラー”であり、織斑君はそれを狩る”魔戒騎士”であるという。

作り話にしては細部までしっかりしている。それに今、織斑君の胸に掛かっているアクセサリー、いや、”魔導具”の存在が何よりの証拠だ。

さらに数日前、ISの武装すら破壊する様を私はこの身で味わった。アレは、ISで倒すことは不可能だ。

これだけを聞くと魔戒騎士はヒーローとも思える。

「ホラーは人や物に憑依して活動する。人が憑依されたら”死”を意味する」

私が憧れるヒーローは決して人を助けることを諦めない。だけど、魔戒騎士は私が憧れるヒーローではなく、多くの人を守るためにホラーを狩る”守りし者”。

「助けられたら、それはいいことだと思う。ホラーに憑依されたら未来永劫、魂は苦しめられる。ホラーを倒さない限り……だから、狩る」

私たちの世界にも”安楽死”というものがある。苦しみ続ける人を助けるための救済というけど、命を絶つことが助けることとは思えない。ましてや、ホラーに憑依されただけで…その人の命を絶つなんて……

「分からないなら構わない。だけど、私やその協力要請を受けている君のお姉さんに関わる限りは、ホラーとは無関係ではられない」

織斑君は、私達が関わらなければいいという話ではないといっているようだ。

「姉さんは自分の関わっている”事”に関わらせたくはなかったんだけど、こうして”事”に私は関わってしまった」

言うまでも無くISに織斑先生は織斑君を関わらせたくなかった。だけど、織斑君は関わってしまった。

私も姉が”裏の事情”を抱えているのなら、そうした事態に関わってしまうのだろうか？

更識家はそういう家だとは知ってはいるけど、そうした事にはまだ私は関わっていない。でも、いつかは無関係ではいられなくなる……

織斑君の言葉を私は考えなければならぬと思う。

「おりむー。お嬢様に”陰我”があるって言ってたけど、そっちはどうなの？」

本音が私も聞きなれない”陰我”という言葉の意味を織斑君に聞いている。

「そっちの方だけど、私の姉さんと同じで何処の家の”優秀な姉”も悩んでいることは同じらしい。あっちは、少し私を舐めすぎだ」

何処の家の優秀な姉の悩み。それは一体なんだろう？その後の織斑君の話に私は、自分の視野が酷く狭く、また自身の事しか考えていなかったことを改められた……………

一夏は本音と簪と別れた後自室へ戻っていた。ドアノブに手を掛けようとした時、扉の向こうに気配を感じた。

「……………」

「一夏、誰か居るぞ。姐さんじゃねえ」

今日、千冬はＩＳ委員会が主催する会議に出ており帰って来るのは明日のはずだ。

言われなくても分かっているのか一夏は目を細めて扉を開けた。

「おかえりなさい。お風呂にする？ご飯にする？それとも……………わ・た・し……………」

部屋の中には、所謂”裸エプロン”と言う格好の更識 楯無が笑顔で立っていた。

茶目っ気たつぷりの子供のような笑みで一夏を見るが、一夏は表情

一つ変えずに……

「お引き取りください。私に貴方のような人は知り合いには居ません」

そう言つて、部屋から出るように促す。

「フフン、いいじゃないの。私達、一応は”同性”だし…貴方のは、どっちが大きいかな？」

楯無は豊満な胸を一夏に見せ付けるように前に進む。やはり一夏は、まったく動じていない。普通の男なら、この状況にアタフタするのだが……

「私は、”どちら”でもない」

「女の子でもあるのは、事実じゃない」

猫なで声で楯無は、一夏の腕に自身の身体を絡める。

（織斑君つて、男でも女でもあるのよね。恋愛は、どっちが好きかな？）

「おいおい、随分と積極的だな。更識楯無」

ヴリルが楯無に対して、挑発的に声を掛ける。

「……………」

一夏は無言のままである。いつもより目が陰しいのは気のせいでは

ない。

「やだ♪そんな目で睨まないの」

「この目は元々だ。私に貴方の行為は、無意味だ。話したいことがあるのなら、はつきり言っただけいい」

一夏は楯無の腕をいつの間にか解き、彼女と正面で向かい合う。

自分に気づかれずに腕を解かれたことに驚いたのか、楯無は雰囲気を変えた。先ほどの雰囲気とは違い、僅かな冷たさを秘めていた。

「そうね……少しぐらい楽しんでもいいんじゃないの？」

楯無はエプロンを解き、自身の裸体を一夏の前に晒した。やはり、一夏は動じない。むしろ、”何故、裸になる”という疑問すら出ている。

一夏の前に、”女の色香”が通じないことに楯無は、内心、舌を打ちながらベッドに腰をかける。

「正直に言ってもいいかしら？」

楯無は、少し間を置き

「貴方の所属する”番犬所”からの要請を受けるまで、”魔戒騎士”なんて単なる”噂”でしかないんじゃないかって思っていたわ。それに、”ホラー”に関しては、未だに信じられないわ」

「それは当然だ。私達”魔戒騎士”は、闇に紛れ、一般人が認知し

ない世界で剣を振るっている。信じられないのは無理もない」

本来なら決して知る必要の……いや、知ることが許されない世界なのだ。目の前に居る一夏は、そういう闇の世界の人間だ。

「だから、”闇の世界”を知りたいのか？それにホラーが信じられないのは無理もないが、興味本位で会おうとするなよ。下手したら、取り付かれるぞ」

ヴリルが楯無に釘を差しておく。理由は言うまでもなく、楯無が興味本位でホラーに近づかないようにである。

「取り付かれたら、私をホラー共々殺すのかしら？あなたは……」

「私もそういう事態には、ならないでほしいと思う。ホラーを狩るのが、私の使命だからだ」

裏の世界を知る人間として楯無は、目の前の一夏と対峙する。一夏の目に迷いはなかった。相手が親しいものでもホラーに憑依されたら、容赦なく葬るであらう。

「それが、守りし者なの？それじゃあ、まるでホラーを狩るだけの”殺し屋”じゃない」

冷たい視線を一夏に向ける楯無だったが相手がこのような恨み言には慣れっこなので、彼女の望む反応は得られなかった。

楯無は無言のまま着替えた後、部屋から出て行った。

「四日後の試合……楽しみにしているわ」

楯無

あれが、”魔戒騎士”。はっきり言って、”殺し屋”にしか見えな
い。

伊達に更識家の当主を務めているわけではないので、裏の世界の人
間とは何度か対峙したことはある。

だが、あのような人間は初めてだ。一つ年下であそこまで己の信念
に邁進する存在は……

むしろ、人としての感情があるのかどうか疑ってしまう。情がない
から、容赦なくホラーごと人を殺せるのかもしれない……

ホラーというモノがよく分からないが、人間が憑依されたら”死”
と同じであるという。

ホラーに憑依されたから、人間ごとホラーを狩る。いや、殺す。生
徒会長としては、仮にIS学園の生徒がそうなることは許せない。

家のものからは、”番犬所”からの要請は受けるという。だけど、
あの織斑一夏を中心に引つ掻き回されるのは、私としては少し許せ

ない。

ホラーは魔戒騎士か、魔戒法師かのどちらかでしか対応ができないためだ。

織斑一夏の戦闘能力は、はつきり言って私よりも上だ。対暗部用の心得のある私だが、相手は”人智を超えた魔獣”に対する戦闘の心得を持っている。

妹の簪をホラーから助けてくれたのは感謝してもいいかもしれない。ただ、ホラーの恐ろしさが分からない私には、どう感謝していいのか……

だけど、学園最強の名に懸けても”更識楯無”は、織斑一夏に負けてはならない。

代々の当主が”勝てない”と称する”魔戒騎士”をこの手で倒し、証明してみよう。これが、”私”だということを……

そうすれば、私は…また”本当の名”を名乗れるかもしれない……

寮の部屋に戻ろうとする私を待ち構えるように、セシリア・オルコットが自室の前に立っていた。

「ちょっと、よろしくて…更識生徒会長」

「何かしら？セシリアさん」

二人は、夜のアリーナで互いにISを展開して向き合っていた。既にアリーナは閉館の時間であるのだが生徒会長の権限を使い、この場に居るのだ。

セシリアの専用機　ブルー・ティアーズと楯無の専用機はミステリアス・レディ。

ミステリアス・レディはブルー・ティアーズと違い、全体的に装甲が薄く、まるで水の鎧を纏っているように見える。

掴みどころの無い性格の彼女をそのまま反映しているようである。

「更識生徒会長。ワタクシは、あなたのその悪趣味な性格を正して見せますわっ！！！！！」

「あらあら……私は、人に言われるほど性格は悪くはないわよ」

「一夏さんの気持ちを察せずにを困らせている貴方が言っても説得力はありませんわっ！！！」

「今年の一年生は、色々と面白いわね」

挑発的な笑みを浮かべ、楯無は自らのISの武装を展開させる。武装白兵戦用のランスである。

対するセシリアは、ライフルを構えると同時にBTを展開させる。

「第三世代専用の武装ね。あなた……そんなに器用だったかしら？」

「そうですね。前のワタクシならそうでしょう！！！！」

ライフルからビームが撃たれる。撃つたと同時に思考をBTに切り替えて、楯無の左右と背後からピットによる攻撃が展開される。

「ふゝん。攻撃の切り替えを速くして、BTの操作の誤差を無くしたの？まるで、織斑君の戦い方ね。でも、甘いわよ」

水色のヴェールが楯無を包み込み、防御する。その防御の膜は非常に弾力性に富んでおり、セシリアからの攻撃を全てカットした後、急速に離脱し、ランスに備わっているガトリングでセシリアの防御シールドを削る。

「っ！？！……なんて、正確な……これが国家代表の……候補生とは違いますわ！！？！」

肩に腹に衝撃を受けながらもセシリアは戦意を失うことは無かった。かつての訓練時代、国家代表のあまりの強さに戦意を失ってしまった。

今も同じく現役の国家代表と戦っている。今のセシリアが楯無と戦う理由は……

（少しでも……生徒会長のISの情報が引き出せば……）

セシリアは一夏が戦うのならば勝利をして欲しいと思い、自らが噛ませ犬として、情報を楯無から得ようと考えたのだ。

セシリアが一夏に勝利を願うのは、彼女にとって一夏が”騎士”であるからだ……

数日前、凰鈴音との話を終えてセシリアは第三アリーナで一夏とISを展開させて訓練を行っていた。

模擬戦を行っているが、一夏はやはり強かった。攻撃を交わし、その上での確な反撃をしてくるのだ。

弓で打ち、剣で切り裂く。一通りの訓練を終えた後二人は、

「やはり、お強いですね。どうすれば一夏さんのように強くなれるのでしょうか？」

「セシリア。私を買いかぶりすぎだ。私などよりも強い”男”はいくらでも居る」

「ええ、一夏さんよりも強い方がいるのですか！?!」

セシリアの言葉に一夏は、

「うん、特に”あの人”には絶対に追いつくことができない。それに今の私があるのも、あの人、鋼牙さんのおかげだ」

一夏の脳裏に魔戒騎士の最高位 黄金騎士 牙狼、冴島 鋼牙の姿があった。一年前、孤独な戦いをしていた自分と共に戦ってくれた”仲間”でもある偉大なる”先輩魔戒騎士”。

様々な強敵ホラーと戦い、恐るべき七体の使徒ホラーを殲滅し今や、元老院所属の魔戒騎士だ。

「鋼牙さんは今も”強く”なり続けている。私以上に……だけど、いつかは……あの人と肩を並べるようになりたい」

その時の一夏は、何処か遠くを見ているようにセシリアは見えた。セシリアは知らないが、一夏の心には”黄金騎士”の雄姿が今も存在しているのだ。

（例えば、ワタクシは一夏さんの事を何も知りませんのね。貴方が何を目標にし、何になりたいのかを……あなたの強さは、あなただけのモノではないんですのね）

一夏の”強さ”の秘密が少しだけ見えたセシリアだった。もっと知りたくなった……

一夏には一夏が過ごした時間がある。それは、一夏だけが知ることでありセシリアが知ることができない物語。

楯無は強烈な突きを連続でセシリアに放つ。放たれたセシリアは、ライフルを楯に防御し、B Tを動かそうとするが、食らい付いてきた楯無の攻撃に思考が乱されてしまう。

「遠距離戦仕様のブルー・ティアーズもこうされると何もできないわね」

さらにガトリングがセシリアを襲う。突きとガトリングによる銃撃による攻撃により、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーがさらに減っていく。

セシリア

實力は、圧倒的に開いていますが、貴方には一矢を報いて見せますわ！……！！

一夏さんもご自身が”理想”とする”強さ”を目指しております。ですから、ワタクシも……

いつか、ワタクシが自分が理想とする”強さ”を得られるまでは……一夏さんを支えられるようになるまでは……

鈴さんも、油断はしないでくださいよ。ワタクシも一夏さんに想いを告げて見せます。ですが、この想いは今は、留めておきます。

一夏さんに今、告白しても迷惑がられるでしょうね。だから凰鈴音さんも保留にしているのでしょね。

一夏さんの事をだれよりも考えて、一夏さんが一夏さんで居られるように……

だけど、ワタクシは一夏さんには勝って欲しい。生徒会長にあなたが何を見たかは知りませんが、勝ってそれを断つことが、この方にとっても良いことなのでしょう。

ですから、必ず勝って下さい！……！！……！！……！！

ワタクシは一か八かの接近戦を仕掛けるべく、ショートブレードを水色の装甲に突き立てました………

勝者 更識 楯無

アリーナの地表で息をついているセシリアに楯無は問いかけた。

「ねえ、どうして私に挑戦をしたの？」

「……………あなたのその悪趣味な性格を正そうと思っただけですわ」

「嘘ね。貴女は、国家代表の強さを知っているわ。分かっているのに戦いを挑むのは自信過剰にも程があるわね」

話すことが無いのか楯無はそのまま背を向け、入り口で待っていた虚と共にアリーナを後にした。

「……………織斑一夏のためかしらね」

織斑一夏と更識楯無との試合の前日、鈴は一泊二日の外泊の許可を取り師匠である烈花の下を尋ねていた。

「IS学園は寮制と聞いていたが、かなり融通が利くのだな」

さっそく尋ねてきてくれた弟子に近況を聞きながら、今、鈴が巻き込まれている事態を話す。

「そうなのよ、アタシも修行中の身だから、こうして烈花さんの所に来られるのはありがたいから良いけど…」

「確かに。お前の修行を疎かにしてしまつのはだめだ。一週間に一度は、俺の所に顔を出してもらつぞ。鈴」

烈花が不敵な笑みを弟子の鈴に向ける。この笑みに鈴は、表情を引きつらせた。

「何故、表情を強張らせている。まだ鍛え足りんようだな。よし、これから武道場へ行くぞ」

「ええっ！！今からですかっ！?!」

「その後に更識について教えてやる。さあ、来い」

今日は穏やかに師匠の知恵を借りに来たのだが、ここでまさか、修行に入るとは思わなかったのだった。

鈴は烈花に表立って反逆することができないので、彼女はそのまま引きずられるように武道場へと引きずり込まれたのだった……

鈴は一泊二日の外泊許可は貰っているので、学園に戻らなくても良かった。

武道場で烈花と鈴は並んで、構えを取り守りと攻めの型の演舞に入る。

拳を突き出し、蹴りを繰り出す。掌底を放つと同時に法力が赤い螺旋を描く。

肘打ち、身体を大きくそらせたと同時に飛翔し、着地する。これらの動作を烈花と鈴は繰り返し行う。

一通りの型を終えて、互いに礼を取り、稽古に入った。互いの拳と蹴りを交え、競り合う。

「はあっ！！！！」

「やあっ！！！！」

互いに声を上げ、二人は大きく飛翔し互いに拳と蹴りを時には、法力を交えた螺旋が飛び交う。

（…鈴。まだまだ守りが甘い）

烈花は、弟子の様子に自身を少しだけ重ねた。自分もどちらかといえど守りよりも攻める方に転じやすい。

自分のそういうところには、あまり似て欲しくないと思うのだが、鈴が攻めに転じやすいところは、明らかに自分の影響であると考えていた。

掌底を鈴のわき腹に当てる。当てられた鈴は大きく身体を仰け反らせ、そのまま武道場の床に頭を打って気絶してしまった。

「鈴。まだまだ甘い！！！！」

「……あれ、アタシ。何やってたの？」

それから数分後、鈴は頭が痛いを感じながら、意識を覚醒させた。

「愚か者が。俺の一撃を受けて頭を打ち気絶したのだ。守りの型を疎かにしたためだ」

すぐ傍に烈花が腰に手をやって自分を見下ろしていたのだ。

「まったくお前は、相変わらず攻撃に徹すると守りが疎かになる。もう少し、守りを固めろ。敵を倒すのも大事だが、それ以上にお前はお前自身を守らねばならん」

「はい。でも…どうしても”強く”になりたいんです。一夏を、一夏みたいな”守りし者”に……」

鈴は力を求めている。それは自分のためではなく、一人の”想い人”のためであろう……

「織斑一夏は、既に称号を持った魔戒騎士だ。織斑一夏は、今や時

代の中心に近い場所に居る。鈴、お前は、まだそこには居ない」

烈花の言葉に鈴は、自分の力はまだ”想い人”の支えには至らないことを改めて自覚し俯いてしまった。

「焦るな鈴。お前は、必ず”強い”魔戒法師になる。その時多くの人々を救い、織斑一夏の力になる。お前の時代は、まだ先だ。今は、それに備えるんだ」

烈花は鈴の隣に座り、新たに作った笛を奏で始めた。俯いていた鈴も続くように笛を奏でる。武道場を”英霊達への鎮魂”が響き渡った……

稽古を終えた鈴と烈花は、向き合い話し合っていた。

「更識楯無だが、これは本名ではない。代々の当主に告げられる名前だ。おそらくは、本名は別にある」

烈花は自身が知っている”裏の世界”の事情を鈴に伝える。彼女は魔戒法師の修行の傍ら、そういった”一族”の事も知識として習得していた。

かつての師”アカザ”の伝手もシグト共に引き告いでおり、烈花の顔はそれなりに広い。

最も烈花が有名なのは”女でありながら魔戒騎士顔負けの戦闘能力”、”ホラーすら怯む程の暴れっぷり”である。

年配の魔戒法師からは女のくせに出しゃばり過ぎと言われているが、某騎士は”守りし者に、男も女も関係ない”と反論している。

「ホラーが憑依することは自分ではない自分に脅かされることだ。楯無自身も、本名ではないこの名に何かしらの”感情”を抱いているのだろうな。ある意味、ホラーに憑依されるのと同じことかもしれない」

烈花は、鈴に楯無が一夏に魔戒騎士に勝負を挑んだのは、そういう思惑もあってではないのかと言う事を伝えた。

「それって、何だか複雑……」

「そうだな。俺としては、更識家の当主にそんな”小娘”を据えるから、こういう事になったのだと思う」

「何だか嫌ね。そういう家に生まれなくてよかったわ、アタシ」

「そうだな。俺は女に生まれたことを恨んだ事もあったが、今は自分に満足している」

「アタシは、今の自分にはまだまだ不満を持ってるけど、いつかは誇れる自分になるわ。そういえば、シグトは何処に行ったの？見な

いんだけど……」

「ああ、あいつなら新しい”号竜”の受け取りで離れている。今夜は帰らん。それとシグトを呼び捨てにするな。馬鹿者がっ！！！」

鈴の頭に特大の拳骨が当たったのは言うまでもない。凰鈴音が一人前の”魔戒法師”になる日は、まだまだ遠い……………

試合当日

第一アリーナは、これまでにない観客で満席だった。今日の対戦カードは、更識楯無VS織斑一夏の注目の一戦であったからだ。

ビットでは千冬、真耶、箒、セシリア、鈴の三人が居た。

「織斑先生。織斑君は、大丈夫でしょうか？相手は国家代表ですよ」

「何を言っている、山田君。私の弟だぞ、更識如きに遅れは取らんぞ」

普段は生徒を鼻屑にしないのだが、珍しく一夏を推している千冬であつた。

「あれっ？珍しいですね、普段はあまりそういう事は言わないのに」

真耶の言葉に千冬は

「なに……弟に勝手な因縁をつけてきた小娘に負けるはずがない。それにあいつは、楯無の”陰我”を既に見ているようだからな」

箒、セシリア、鈴の三人はビットから飛び出し、第一アリーナ上空で対峙する一夏と楯無が映るモニターに視線を向けていた。

第一アリーナ上空

「織斑君、どうかしら？第一アリーナは、気にいてくれたかしら？」

楯無は笑みを浮かべて一夏に尋ねる。一夏は狼を模したバイザーをつけているため表情は伺えない。

「別に何が変わるわけでもない。こういう見世物になるのは、これつきりにして欲しい」

「あらあら、言うわね。ISはスポーツなのよ。観客を魅せて、楽しませるのも私たちの役目よ」

水のヴェールが揺らめく様は、彼女の掴みどころの無い性格を現しているようだ。

「悪いが、私は人を楽しませる”能”は無い。だから、早めに切り上げさせてもらうぞ」

「ふふふふふ、言ってくれるわね。さすが魔戒騎士だわ。だけど、その魔戒騎士を倒せば私も拍がつくわ」

そのときの楯無の表情は、まるで獲物を捕らえた肉食獣のようであった。

「やっぱり心に陰があったか……一夏、あの子の陰我、お前が断ち切れ」

「言われるまでもない。楯無さんは、まるで”昔”の姉さんみたいだ。だから、放っておけない」

試合開始のブザーがアリーナに響き渡った。

一夏

楯無さんの”心の陰”。それは、年相応の少女であることを望む心。裏の一族の家に生まれたことで、その影に生きることを教えられ、普通の少女であることを許されなかった。

まるで私を育ててくれた”姉さん”のようだと思う。

学生の頃から、幼い私を育てるために四苦八苦していた姉さんは、社会の理不尽さに耐えるために年相応の”少女”であることを捨てた。

でも本当は、心では”普通の少女である”ことを望んでいた。

幼い頃、姉を駅まで迎えに行ったときに、流行の服をウィンドウから見ていた姉さん。

同じ年頃の少女達が遊ぶ光景をうらやましそうに見ていた姉さん。

顔も分からない”両親”に捨てられた姉さんは”普通の少女”であることを諦めなければならなかった。

好きな”異性”だって居たかもしれない。もっと遊びたかったかもしれない。

だからこそ、私にその願いを託すように”普通”であることを望んでいた。だけど、姉さん。本当は姉さんが望むべきだと言いたかった。

今の私は、普通とはいいがたい。魔戒騎士で、一般の人の生活を捨てている。だけど、この事に後悔はしていない。

私は”守りしもの、闇を照らす希望の光であらなければならない”

姉を不安にさせている私は、本当の意味で”強く”はない。だから、姉を安心させたい。だからこそ、”強く”になりたい。

だからこそ、この勝負。負けるわけにはいかない。

試合開始と共に一夏は、雪片を構え瞬時加速を伴って楯無に迫った。ブレードを横なぎに切りつけるが、楯無はランスでそれを防ぐ。

凄まじい衝撃に対して口元を歪め、楯無は

（想像以上に”力”が強いわ）

蒼牙は接近戦を主体としておりそのためパワーとスピードに優れている。何とかこれを弾こうとランスに意識を寄せるが、対する一夏は回し蹴りを加えてきたのだ。

水のヴェールが一夏の蹴りを弾く。その瞬間に一夏は上昇し離れる。

「女の子に蹴りを加えるなんて……やってくれるわね」

「戦いに女も男も関係はない」

一夏の容赦が無い攻撃に楯無は冷や汗をかくが、一夏は涼しい顔である。

男は女を傷つけてはならないとフェミニストは言うだろうが、一夏は女でもあるので女に攻撃することに戸惑いは無い。

この光景に冷や汗を流すのは、楯無だけではなかった。

「……おりむー。本当に織斑先生の弟なんだね」

「……………織斑君」

本音と簪は一夏の容赦の無さに頬を引きつらせてしまった。

同じくピントでも……

「一夏……昔のお前は、私に似てもう少し穏やかだっただろう」

何故か嘆く千冬。

「やっぱり、先輩の弟です。織斑君は……」

真耶は代表候補生時代の頃の千冬と一夏の姿を重ねた。

「一夏の奴。かなり荒っぽくないか？」

「一夏さん……！遠慮は要りませんわ……！！」

「一夏のISって、あれをそのままコピーしたのかな？」

三者三様の反応だった……

一夏

国家代表なだけに流石に強い。先ほど離脱したときに”人体”でいう急所の”肝臓”のあたりを突こうとしてきた。

咄嗟の反応と判断力は、十分に実戦でやってのけることができる。さすがは、更識家の当主だけはある。

距離を取られた私に、楯無はランスに備え付けられているガトリングを放つ。狙いは正確だ。私を遠ざけようと距離を作っている。

僅かではあるが蒼牙の肩の部分に当たってしまふ。いつまでも当たるわけにも行かないので六枚の翼を展開し回避したと同時に瞬時加速を発動させて雪片で切りかかった。

楯無

これが魔戒騎士の実力。今まで戦ったどの相手よりも強い。ダメージを受けること覚悟で攻撃を仕掛けてくる。

正面から来た攻撃を水のヴェールで防御をするが、それを押し切るようにしてヴェールを勢いと斬撃で圧してきた。

「くっ！？！やるわねっ！？！でも、簡単には負けられないわ！！」

ヴェールに指示を出し、より強固なモノに変化させる。

私の専用機のほとんどは”ナノマシン”によって構成されていて、私の意志一つでその形状を変化させることができる。

水のヴェールを楯から槍に変化させて、織斑君に攻撃を加えるが、織斑君はそれを全て刃で薙ぎ払い、拳を私に叩きつけてきた。

ISの力は、殴るだけでも凄まじいものを誇る。それをまともに受ければ、当然のことながらシールドエネルギーは削られ、ダメージを受ける。

でも……これぐらいで勝ったとは思わないでねって……思っていないわよね。

楯無は、目の前にいる一夏の周囲に怪しい視線を向ける。

雪片を使い、一夏は楯無に追い討ちをかけようとするが、楯無の専用機が展開する水のヴェールが少し気になっていた。

それと自身の勘が周囲に気をつけると言っているのだ。先ほど形状を変えたところから、それなりに厄介な能力があると見ていたのだ。相手は国家代表。自身の姉である千冬もそうであるが、一段の構えではなく二段、三段の構えを備えているであろう。

「織斑君。あなたは強いわ、私よりも……だけど、ISでの勝負なら絶対に負けないわ。何より、これなら絶対にあなたに勝てる」

楯無は自身のISのモニターが表示する蒼牙の周りの湿度が異常に高まっていた。

左の親指を中指で指を”パチン”と鳴らす。

音と共に、蒼牙の周囲に散布されていた水の分子が一斉に水蒸気爆発を起こす。

これが、楯無の得意とする”クリアパッション”。一斉に加熱して水蒸気爆発を起こすものである。

「最後に勝つのは、私よ。これで代々の当主が上げられなかった白星を私が初めて……悪いが、こっちもやられるわけにはいかないんだ」

爆発の影響で爆煙が立ち込めるが、蒼牙は悠然と立っていた。その全身に炎を纏って……

「危なかったな一夏。まさか、こいつを使う事になるとはな……」

ヴリルが蒼牙のモニターに見える99・9秒からカウントされている表示を見た。

「ああ、蒼牙の”烈火装甲”は、全てを攻撃にまわしている。だから、早く切り上げる」

雪片の刃を向け一気に楯無のミスティアス・レディに向かっていく。

「まさか、”クリアパッション”をあの炎で相殺したの？」

思わぬ切り札に楯無は驚くものの直ぐに、自身の奥の手である”ミストルテインの槍”で迎撃すべく防御用の装甲表面を覆っているナノマシンを一点に集中させ攻性成形を遂げる。

防御用のナノマシンも攻撃に回されるため、自身も大怪我を負いかねない”技”である。

「負けるわけにはいかないわ！！！！私が、私であるためにも！！！！！！！！」

95・7秒……

炎を纏った蒼牙は雪片を上段に構えて切りかかる。

83秒

ミステリアス・レディ正面に集中される”ミストルティンの槍”

70・60秒

二機のISが近づき、二機のエネルギーがぶつかり合う。

「最後に勝つのは、私よ！！！！！！織斑君っ！！！！！！」

小型気化爆弾四発分の威力が蒼牙を襲う。蒼牙は怯むことなく進み六枚の羽を大きく展開させ、勢いをまして”ミストルティンの槍”の威力を真っ向から受ける。

40秒

「あつちいつ！！！！熱いぞ！！！！」

生身の人間ならば跡形も無く消滅していたであろう熱量に耐えられるのは、ISの絶対防御のおかげであるが、このまま受け続けるのはさすがに厳しい。

頬に汗を掻くのを感じながら一夏は、集中した”エネルギー”の本流をいなす様に雪片をそのまま振り下ろし、その刃を踏み台にし足蹴りにしてエネルギーの無い楯無の頭上へ跳び上がった。

30秒

「『『『『ゆ、雪片を踏み台にしたっ！！！！！！！？！！！！』』』」

これにはアリーナ全体が大きく驚いていた。まさか武器を手放し、それを踏み台にするなど考えられなかったからだ。

特に千冬は、自分ですら思いつかなかった”雪片”の使い方に開いた口がふさがらなかった……

20秒

楯無は目の前の状況に驚くも直ぐに態勢を立て直そうとするが、頭上に居た”烈火装甲”を纏った蒼牙は弓を展開させ、矢を楯無に放った。

「くっ！？！！わ、私は……」

立て続けに放たれる正確無比な矢を防ぐ事ができずにシールド・エネルギーは削られ……0になった。

10・9・8・7・6・5・4・3・2・1……TIME OUT

時間が過ぎ、”烈火装甲”が解除された蒼牙のエネルギー量は10を切っていた。

「勝利者 織斑一夏」

「あれ？負けちゃったの？私……」

楯無は、自身の敗北が信じられないのか呆然としていた。”ミストルテインの槍”を正面に捕らえたときに勝利は確信していた。

だが、相手は自分の想像だにしないやり方で打開し、勝利したのだから……

「はははは、これが魔戒騎士。勝てないわけだわ……」

歴代の当主が勝てなかったのも分かる。いかなる困難にも決して怯むことなく突き進んでいく彼らを止める術などないのだから……

奇襲ではなく、真っ向正面から勝利されては悔しさも無い。むしろ清清しささえ感じてしまう。

まるで霧が晴れたかのように楯無の気持ちは晴れやかであった。

「織斑君……あなたに聞きたいことがあるわ。あなたは、望めば”一般人”として生きられたのに、どうして進んで”その道”を選んだの？」

楯無の言葉に一夏は、

「それは、これが私の進むべき道だと分かったからだ」

”強くなれ、一夏。守りし者として。そして、希望の光となるんだ”

「あなたは、自分の未来を闇にゆだねるの？」

「それが私の”運命”だ。それを選び、受け入れたのは私自身の意思。だからこそ、逃げることは考えられない」

「……強いわね。あなたは、私は”更識楯無”であることを受け入れたけれど、何処かで逃げたいと思っていた。あなたは逃げたいだなんて考えないのね」

「逃げてもどうにもならないことを知っているからだ。でも、どんなに辛いことがあっても必ずいつかは終わる」

一夏の言葉に楯無は、魔戒騎士達に面白半分で、いや、自身の我侭で接してしまったことを今更ながら反省の念を抱いたのだった。

「楯無さん。いや、あなたの本当の名前は？」

「ふふふ、今は楯無で良いわ。織斑君、そういえば、あなたは魔戒騎士の称号を持っていたのよね。それを聞いても構わないかしら」

前当主は、魔戒騎士は己の称号を持っているという。一夏もまた持っているのではないかと思ったのだ。

「ああ、私の魔戒騎士としての名は”ジン”。”蒼天騎士”だ」

今は夜があっても必ず、朝が来る。その空には……眩いばかりの蒼い空が広がっている。

私が受け継ぐ名は、蒼天騎士 ジン。ジンは、

旧魔界語に伝わる”バラデューク・バラゴ・ヤリュバ・ガロ”

ヤリュバに由来するヤイバ”刃”を別の読みである”ジン”から来ている。

”全ての騎士は希望の光となる”

ジンは我々の世界で”仁”と書き、それは慈しみ。儒教で人道の根本、最高の徳であるとされる……

第九話「更識楯無」(後書き)

烈花と鈴の関係は良好です。烈花は、女前なキャラだと思います。

烈花は、鈴との絡みが多いです。師匠なので、弟子の鈴が心配なんです(笑)

鈴も鈴で烈花には懐いています。

アクセスがいよいよ90000を突破し、ユニークが10,000に came ました。ありがとうございます!!!

それでは、では!!!!!!

少し頭が痛い協力者も得られたし、今の状況は納得しておこうか、一夏。

そういえば、”彼女”がお前をモデルにした絵を描いていたな。

今度、個展を開くって言ってたな。せっかくだから、見に行ってみるか。

次回!「個展」

異国の少女は、そこで一枚の絵画に目を奪われる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9077w/>

IS × GARO

2011年11月28日09時54分発行